

テレビ視聴回数と視聴継続時間

テレビ基本視聴行動の分析

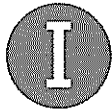
●世論調査部 上村修一

要約

- 視聴率調査データにより、視聴率ではつかめない視聴者の動き＝視聴行動を分析した。「テレビを見始める」「テレビを見終える」「チャンネルを変える」行動を基本視聴行動とし、指標として視聴回数と視聴継続時間を中心に用いた。
- これにより、テレビを見る回数は1日平均2.6回で、テレビを見始めると平均94分視聴が継続することなどが分かった。同様にチャンネルを変える行動や視聴終了行動をみていった。また、時刻別に基本視聴行動の発生率や初めて見始める時刻や最後に見終える時刻なども明らかにした。
- これらの視聴行動は20年前と比較して、大きな変化はみられなかった。これは、視聴行動は生活行動と強く関連しており、生活行動の構造が20年で大きく変わらないため、変化が生じにくいと考えられる。
- 視聴行動の指標としての視聴回数や視聴継続時間は必ずしも便利で利用しやすいといえないが、視聴率で把握できない知見が得られること、イメージしやすいことなどの利点があり、視聴率分析の補完として有効である。

目次

I 視聴行動の視点172	III 視聴行動分析の有効性194
1. 視聴行動とは	1. 視聴行動の知見
2. 調査データと分析の方法	2. 視聴行動分析の有効性
	3. 今後の課題
II 視聴行動の分析176	参考文献
1. テレビを見始める	付表
2. テレビを見終える	
3. チャンネルを変える	



視聴行動の視点

1. 視聴行動とは

テレビ視聴の調査研究はごく大まかに分ければ、人々がテレビをどのように見ているかという視聴実態を把握・分析する領域と、人々がテレビを見た結果、それが個人や周囲の人々、あるいは社会全体にどのように影響し、どのような役割を果たしているかを人々の意識を中心に調査研究する領域に分けられよう。

前者が広い意味での視聴行動の分析であり、これはさらに、人々がいつごろ、どのような番組をどのくらい見るといった直接的に行動の側面を解明する狭い意味での視聴行動分析と、視聴行動に関する一定の傾向や特徴を解明する視聴態様分析に分けられる。後者は、例えば、「ひとりで見るほうか、誰かと見るほうか」、「テレビだけを見るほうか、何かをしながら見るほうか」など、いわば意識態度や嗜好を含んだ広い意味での視聴行動といえる。

近年、多メディア、多チャンネル化、インターネットの普及などによるテレビ視聴の変容を想定したテレビ視聴行動に関する調査分析報告をみかける。しかし、これらは質問紙法による調査が一般的であり、行動の分析というより意識化された態度、行動傾向の分析が多く、広い意味での視聴行動分析といえる。ここで扱うのは、前者の狭い意味での視聴行動（以下、視聴行動）であり視聴態様は含まない。

テレビ視聴行動は視聴率を中心に分析・理解されている。視聴率はきわめて有効な指標であるため、テレビ視聴に関する大半のことがらが見聴率で理解できると思われるほどで

ある。本稿は、視聴率が重用された結果、あまりかえり見られなくなってきた指標によって視聴行動をみようとするものである。これによって、意外かもしれないが、これまで知られていなかった知見、例えば、視聴者は1日に何回テレビを見るのか？1度テレビをつけると何分くらい見るものか？最初にテレビをつける時間は何時ごろなのか？…などを明らかにしていきたい。

(1) 視聴率の限界

テレビの視聴率調査は、NHKではテレビ放送開始の翌年(1954年)から、翌日面接法による調査で行われていた。その後、1971年から1週間連続の時刻目盛り日記式の配付回収法に切り替わり現在に引き継がれている。他方、ビデオリサーチ社などでは1960年代初頭から機械式の世帯視聴率調査が行われ、その後1990年代中ごろから押しボタン式の世帯内個人視聴率(PM)調査が導入されている。

これら視聴率調査の当初の目的は番組視聴率の測定にあった。番組視聴率は、あらかじめ単位時間(NHK調査では5分ごと)の視聴者の比率(視聴率)を算出し、それを番組放送時間で平均して算出する。視聴率は番組放送時間に限らず、1時間ごと、あるいはゴールデンアワーといった一定の時間帯を設定してその時間帯の平均視聴率を算出することができる。

視聴率が有効な理由のひとつは、このような単位時間の視聴者の比率という定義の明快さにある。そこには条件もただし書きも必要ない。また、単純な計算によって番組の視聴状況にも、時間帯の視聴状況にも、あるいは

特定の放送局やテレビ全体の視聴状況の把握にも適用できることにもある。

ただし、視聴率は一定の時間帯における視聴者数を表すだけであり、個々の視聴者の動きを直接表すものではない。例えば、ある番組を10%の人々が最初から最後まで見ると視聴率は10%であるが、前半と後半の10%それぞれの視聴者が完全に入れ替わっても視聴率は10%で変わらない。視聴率は平均値として抽象化されるため、個々の視聴者の動きが見えにくいのである。

たとえば、高速道路の流量測定のようなものである。高速道路では区間ごとに通過する車の速度を測定することで、高速道路全体の通過台数や渋滞状況を把握している。しかし、個々の車に着目した場合、1台あたりの走行距離や運転時間、ルートを選択、1日の利用回数など車を中心とした動きはつかむことができない。ここでは、個々の車の動きに相当する個々の視聴者の行動をみようとするものである。

(2) 視聴行動の指標

視聴率調査の分析は平均視聴率によるものが大半だが、視聴者の行動がみられる指標がないわけではない。平均視聴時間がそのひとつである。一般的には1日あたりの平均視聴時間が用いられることが多いが、テレビの視聴量の目安として非常に分かりやすい。例えば、1日の平均視聴率が18%というより、視聴時間が平均3時間というほうが実感はわく。しかし、衛星放送の視聴時間は1日10分弱と聞くと実感からは遠い。平均視聴時間は、衛星放送を見ない人を含めた視聴者全体の1人

あたりで算出しているもので、見る人が少ない衛星放送では、小さな値となるのである。このように、平均視聴時間が必ずしも分かりやすい指標というわけでもない。

このほかにも、複数の番組をどのような組み合わせで視聴しているかを分析する「視聴の重なり」や、ある時刻前後の視聴者の局移動を分析する「視聴の流れ(流入・流出)」など視聴者の動きを捉えるいくつかの指標(集計)が利用されてきた。ただし、こうした指標は特定の問題(番組改善など)に対症療法的に個別に利用することが多く、視聴者の動き=視聴行動の系統だった分析はあまり行われてこなかった。

視聴行動の分析があまり行われなかった理由としては、まず、視聴行動のデータを得るには、行動を直接的に記録した視聴率調査などの個票データが必要である。しかし、そうした個票データの入手は実質的に難しい。

第2に、前述のように個々の視聴者の動きを得る指標は問題の数と同数ほどと考えられるが、その集計も個別的であり、調査相手ひとりひとりのデータを判定するなどの集計も煩雑である。

第3に、そのようにして得られたデータが平均視聴率に比べ、必ずしも視聴実態の理解に大きく役立つとは限らない。衛星放送の平均視聴時間の例でも分かるように、一定の前提条件や留意点を考慮して分析する必要があり、それよりも実用上は視聴率の動きをみれば十分なことが多い、などの理由による。

しかし、冒頭にも述べたように、視聴率が重用された結果、視聴行動の基本的部分でさ

え不明になっている。平均視聴率から個々の視聴者イメージを想像することは難しいが、視聴回数や視聴時間のような視聴行動（の率）ならば比較的イメージ化が容易である。こうした視聴行動の知見は視聴者モデルの構成に役立つにちがいない。また、テレビとその周囲のメディア環境が大きく変化しつつある中で、視聴行動の現状をおさえておく意義があると考えられる。

2. 調査データと分析の方法

(1) 日記式調査とその特性

ここで使用するデータはNHKの全国個人視聴率調査（2003年11月、1983年11月）であり、この調査について簡単にふれておく。調査は1週間にわたり、調査相手が視聴したテレビラジオの放送局と視聴時間を記録してもらう。調査票はマークシート式で時間軸に5分単位の目盛りがあり、視聴した局の該当の時刻欄に線を引いてもらう。（図0-1）

図0-1 時刻目盛り日記式調査票（見本）

時刻	ラジオ					テレビ						
	NHK第一	NHK第二	NHKFM	民放FM	民放不明	NHK総合	NHK教育	民放不明	NHK衛星			民放衛星
									BS1	BS2	ハイビジョン	
7:00												
15												
30												
45												
8:00												

こうした調査方法のため、データの分析には以下の点に留意が必要である。まず、調査相手の視聴記録＝線を引く行為は視聴後の想

起によるものであり、機械調査のような時刻の精密さは期待できない。記録は5分単位であるが、調査相手にとっては自分が意識し、感じた時間が視聴した時間とされる。仮に9時54分まで番組を見てテレビを消したとしても、意識としては10時まで見たと感ずるかもしれない。これは、調査方法が不正確というより、意識された時刻が調査に反映されているとみなすほうがよいのではないか。

次に記録される視聴局についてである。調査票の限られたスペースのため、放送局（チャンネル）欄は限定される。民放局は地域ごとに番組編成が異なるので、全国的な調査では一括してまとめている。したがって、民放局間の動きは全国的には把握できないが、関東、近畿については民放ネット局ごとに調査しており分析が可能である。

同様に民放ラジオや民放の衛星もまとめて調査しており、ケーブルテレビやBS・CSなどの多チャンネル化に対応していない。ただし後述するが、これら多チャンネル専門局の視聴量は少ないため、基本的な視聴行動の分析には支障がないと考える。

なお、この調査では1日の区切りを午前5時としており、暦日では翌日になる午前0時以降も、時刻は24時、25時…のように同じ日として扱っており、ここでも同様の24時間制で表記している。

(2) 基本視聴行動の定義

データの分析の前に、ここで扱う視聴者の動き＝視聴行動の概念について、操作的だが定義しておく。ここでの視聴行動とは、視聴者がテレビ、ラジオを視聴する行為であり、データとしては時刻目盛り式視聴率調査票に

記入された「線」に対応するものとする。

調査票に記入された一本の線は、ある時刻にあるチャンネルの視聴を開始し、ある時間視聴して、ある時刻にそのチャンネルの視聴を終了するという一連の視聴行動をセットとして表現している。

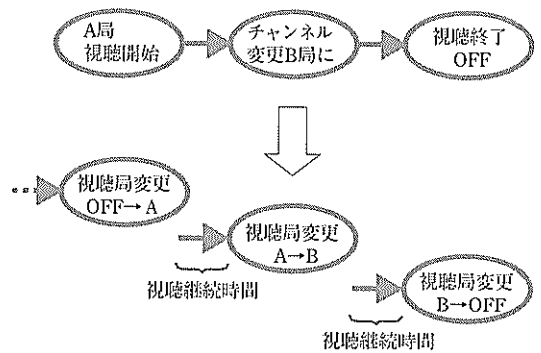
さらにこれを、視聴に変化が生じる時刻という点に着目して抽象化すると、視聴の変化はそれまで見ていた視聴局（以下、前局）とその後で変えて見始めた局（以下、後局）とそれが生じた時刻の3要素で構成できる。視聴していない状態（オフ）もひとつの視聴チャンネルとみなせば、前局がオフなら①「視聴の開始行動」であり、後局がオフなら②「視聴の終了行動」である。前局も後局もオフでない場合は③「チャンネル変更行動」であり、視聴変化はこの3つの行動のいずれかになる。

では、あるチャンネルを見続ける状態はどのように位置づけられるだろうか。ここでは、視聴は必ず終了することから、前局の視聴継続時間を終了行動やチャンネル変更行動に付随する第4の要素と考えることにした。つまり「視聴中」を含む視聴行動は視聴変化行動とみなせ、「変化時刻、前局、後局、前局の継続時間」という単純なデータ形式に抽象化できる。このデータ形式により3つの視聴行動（これを基本視聴行動とする）をみていく。（図0-2）

(3) 基本視聴行動の分析方法

これらの3つの基本視聴行動を分析するにあたり、ここでは視聴者の個々の動きをイメージしやすい指標によって考えていきたい。第1は視聴回数である。回数は理解しやすい

図0-2 視聴行動の考え方



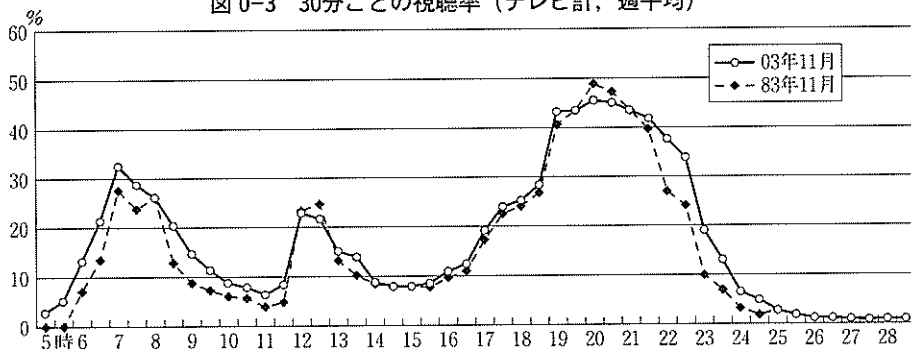
概念だが、視聴率＝視聴者数とは必ずしも対応しないため、あまり用いられない。せいぜい番組やCMのRF（累積到達率・視聴頻度）分析に使われる程度で、1日を通した視聴回数はめったにみかけない。これによって、テレビ局が視聴者を得る機会が何回ぐらいあるのかが分かる。

第2は視聴継続時間である。1日の平均視聴時間はよく用いられるが、ここでは、そうではなくて視聴1回あたりの視聴時間を問題にしたい。それは人々がどのくらい同じ状態を維持できるか、どのくらいの長さの番組が適当なのかという回答を提供してくれよう。

これらの指標の分析方法としては、全体的な平均値を求めた後、さらに①曜日別の差異、特に生活が異なりテレビの見方が異なる平日と土日の差。②生活が異なり、関心も異なることからテレビ視聴の差異が大きい男女年齢別の差異。③朝と夜など時刻によって生活が異なることで視聴行動に差がある時刻別の差異、の順でみていく。

そして、これらを見た後に20年前（1983年）の同じ指標を比べることで、視聴行動の変化

図 0-3 30分ごとの視聴率 (テレビ計, 週平均)



をみていく。20年前を選んだのは、テレビ放送が始まって30年近く経過し、送り手も受け手もテレビ初期の熱中した段階から、落ち着いた一定の成熟段階に達していたこと。しかし、BSもCSもまだ始まっておらず、多チャンネル以前の状態にあること。現在とほぼ同様の形式のデータが入手できること、などによる。

なお、20年前(1983年11月調査当時)の視聴状況は次のようである。

放送時間は6時から24時までが中心であり、24時間放送は民放が87年から開始した。

ビデオは普及の初期で80年代後半に急増する。BSは84年に試験放送が開始され、CSの登場は90年代である。

テレビ視聴時間は漸減しており2年後の1985年が底で、以後増加に転じる。

夜間とはもかく、午前、午後はニュースを中心にNHK総合がよく見られていた。

この年は「おしん」が大ヒットしたが、一般的にはドラマよりクイズ、ゲームなどへの人気があった。

Ⅱ 視聴行動の分析

1. テレビを見始める

(1) テレビの視聴回数

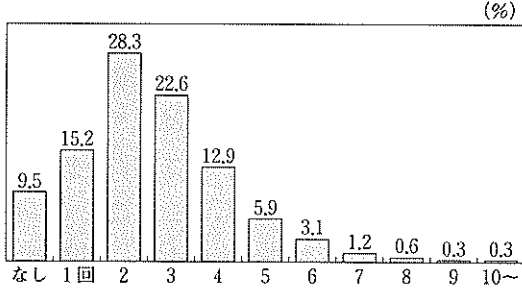
まず、テレビを見る回数、つまり1日あたりのテレビに接する回数をみよう。これは番組を見る回数ではなく、テレビを見始める(オフまたはラジオからテレビに変わる)回数とする。当然のことだがテレビを見終わる回数と一致する。

1日あたりの視聴回数の分布(週平均)は2回(28%)と3回(23%)で半数を占める。これに、1回と4回を加えると全体の79%になる。5回以上は11%と少ない。平均視聴回数は2.6回であり、そう何度もテレビをつける(見始める)わけではない。(図1-1)

1日に2~3回の視聴回数というのは、テレビ視聴率の朝・昼・夜の3回のピークに対応するのであろう。4回以上の視聴者は深夜や夕方など視聴率のピーク以外の時間帯での視聴と考えられる。視聴する時刻については次の(2)であらためてみていく。

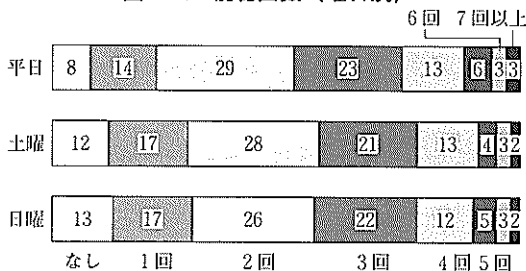
平均視聴回数を曜日別にみると、平日(2.7

図1-1 1日の視聴回数の分布（週平均）



回)より土・日(2.4回)が少ない。テレビの視聴時間が長い土日で視聴回数が少ないのは違和感があるが、これは土日にテレビを見ない人(視聴回数0回)や1回が比較的多いためである。土日は平日と生活パターンが異なるため、例えば朝遅く起きたり、行楽などの外出が多く、テレビを見る回数が少ないのであろう。一方、余暇時間が多いため、テレビを見る人はより長くテレビを見ると考えられる。(図1-2)

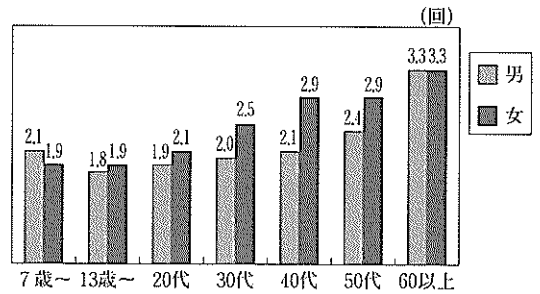
図1-2 視聴回数(曜日別)



次に平均視聴回数を男女年層別にみると図1-3のようになる。男は60歳以上が3.3回と多いが、他は2回前後である。女では20代までは2回程度だが、女30代から多くなり、女60歳以上は3.3回で男と差はなくなる。

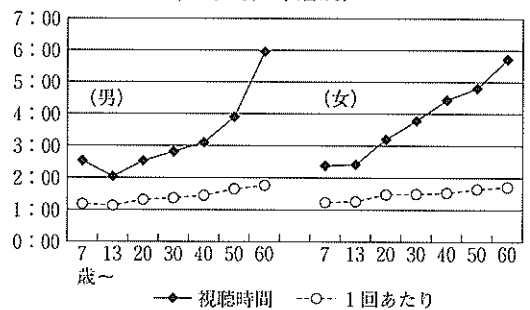
この図を見ると、テレビの1日の平均視聴時間の図に似ていることに気づく。平均視聴時間は余暇時間と関係しているが、視聴回数も同様であり、視聴時間と比例しているの

図1-3 平均視聴回数(年層別, 週平均)



はなからうか。しかし、平均視聴時間を平均視聴回数で除して1回あたりの平均視聴時間を求めると一定ではなく、若年層では約1時間10分だが、視聴回数が多い60歳以上では約1時間40分と長めである。つまり、視聴回数が多い人は1回あたりの視聴時間も長めである。なお、これは全体の平均としての比較であり、個人単位にみた1回あたりの視聴時間の比較は後述する。(図1-4)

図1-4 1日の視聴時間と1回あたりの視聴時間(週平均, 年層別)



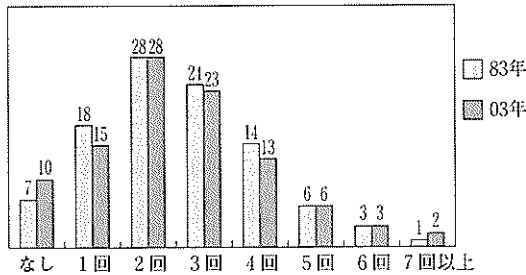
視聴回数は20年前(1983年)とどのように変わったのだろうか。平均視聴回数は83年では2.5回(週平均)と差がない。ただし、分布では、0回(見ない)と6回以上が少なく、わずかだが現在よりばらつきが少なかった。

男女年層別での平均視聴回数でみると、若年層で83年より視聴回数がやや減って見えるが、全体としては大きな変化があるとはい

ない。

視聴回数に関しては20年の変化はあまりないといえるだろう。(図1-5)

図1-5 視聴回数分布の変化(週平均)
(%)



(2) テレビをつける(オン)時刻

次に、テレビを見始める時刻をみていく。テレビを見始める時刻は時刻別の視聴率からおおよそ推定できる。視聴率が急増する時間は、見始める人が多かったことを意味し、逆に視聴率が急減すれば見終える人が多いのであろうと推定できる。視聴率に変化が少ない時間は見始める人も少ないはずである。

しかし厳密には、 $\text{視聴率(視聴者数)} = \text{継続視聴者数} + \text{視聴開始者数} - \text{視聴終了者数}$ であるから、視聴率だけで視聴開始や視聴終了の発生状況を把握することはできない。視聴率が変化していなくても、視聴開始と視聴終了が同数発生しているかもしれない。こうした視聴率ではみえない部分を視聴行動分析で

は明らかにできる。

前節で、テレビを見ていない状態を「オフ」というチャンネルを見ているとみなすことで定義した。「オン」や「オフ」という用語は本来テレビのスイッチオン、オフという機械的な動作から発している。しかし、ここでは意志決定をとまなう行動にも拡大し、視聴開始や視聴終了の代わりに簡潔なオンとオフを用いることにしたい。

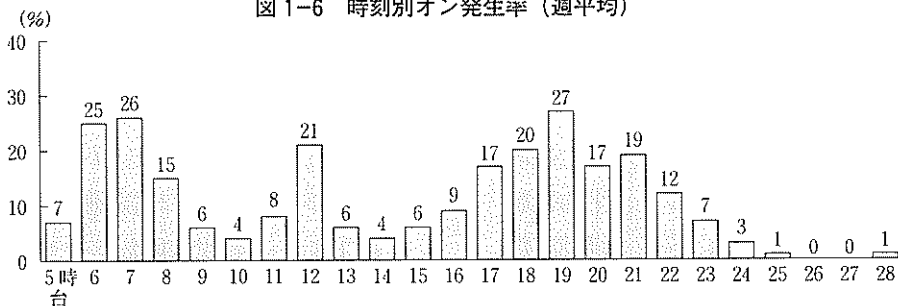
NHKの調査では5分単位に視聴記録があり、5分ごとにオン行動件数が把握できる。これを1時間ごとに合算し、調査相手数に対する割合(発生率)を算出したものが(図1-6)である。

① オン時刻

オン行動が多いのは、6時台(25%、週平均以下同)、7時台(26%)と12時台(21%)で、朝、昼の視聴率を形成する形で発生する。夜は19時台(27%)をピークに17時台(17%)から、22時台(12%)まで視聴開始が続く。なお、このデータは大相撲中継を調査期間に含むため17時台の視聴が他の時期より多い。

午前や午後のテレビ視聴の少ない時間帯でも、オン行動は数%程度で発生している。ただし、24時以降の開始はほとんどない。

図1-6 時刻別オン発生率(週平均)



注目したいのは、7時台、20時台などの視聴率のピーク時刻に先行する形で6時台や19時台でのオン行動が多い点である。19時台では20時台を上回るオンがみられる。テレビを見始めるのは番組自体が引きつける力の他に、生活における要因（例えば食事）など様々な引きつける力＝誘引がある。19時台は20時台まで引き続き見られるという誘引を含め、20時台以上に誘引が大きいともいえるだろう。

21時台もオン行動が多い。これは視聴率のピークではないが、遅い夜での視聴の誘引となる時間なのであろう。夜のテレビ視聴は18～19時台からと21時台からの2波に分かれるといってもよい。

オン行動が多い時間帯とは新規視聴者が多いことであり、逆に少ない時間帯は継続視聴者が多いことを意味する。後述するが、オフ行動を含めて各時間帯の特性をこうした点からも把握することができる。

オン行動時刻を曜日別にみると、平日に比べ土日曜では6・7時台が少ないこと、土曜20時台が少なく21時台が多いこと、日曜9・10時台が多いことなど、休日、休前日の生活を反映した特徴を視聴率より直接的にみることができる。【付表3a】

男女年層別にオン時刻をみていくと、同様に視聴率より直接的に層別の動きがつかめる。例えば、男女7～12歳ではオンする時刻が朝と夜の短い時間帯に限定され、7時台、19時台では7～12歳の40%前後がオンしており、集中的な視聴行動となっている。あるいは、男女20代では18～23時台まで10%以上のオンがみられるように、遅い時間からテレビを見始める人も多いことが分かる。また、男女60歳

以上は、遅い夜は別にして多くの時間でオン行動がみられ、幅広い時間帯でテレビを見られる状態にあることが分かる。こうしたことは、視聴率でも推定されてきたことではあるが、オン行動で確認することができる。【付表4a】

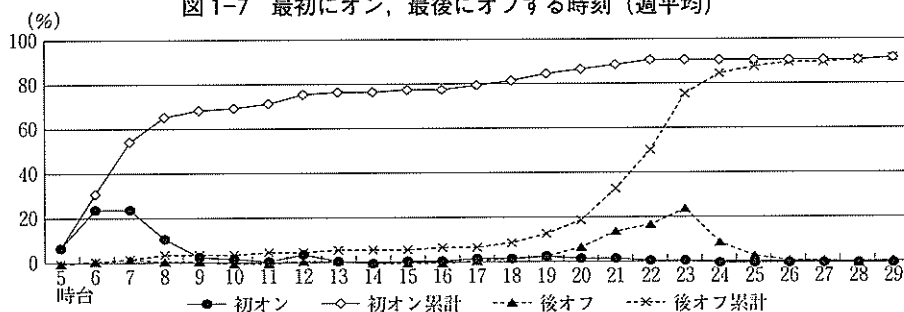
(3) テレビを初めてつける時刻

繰り返しになるが、視聴率は個々の視聴者の動きを必ずしも的確に捉えることができない。そのひとつが、テレビを「最初に見る時刻」である。前述のように視聴者は1日に平均2～3回テレビを見る。朝から見の人が大半と思われるが、午後からあるいは夜から見の人もいるだろう。これを時刻別視聴率から知ることはできない。この最初にテレビをオンする時刻は新規視聴者の割合が推定できることであり、例えばニュースや情報の伝えかたなど番組構成や編成の参考になるだろう。

同じことは「最後に」オフする時刻にもあてはまり、視聴者の大半がテレビから離れる時刻以降は、新規視聴者ではなく既視聴者を意識した番組編成に寄与するだろう。

調査相手ごとに最初のオン時刻、最後のオフ時刻を調べ、1時間ごとに件数を数えたものが【付表5】である。このうち週平均を図示したものが図1-7である。また、この図にはそれぞれの累積比率も図示してある。これによれば、最初のオン時刻は6時台と7時台で約半数を占め、これに5時台と8時台を加えれば全体の3分の2（65%）に達する。これ以外では12時台と19時台に最初のオンが若干みられるが、大半は1%前後が多い。視聴者の大半は朝の時間帯からテレビを見始める

図 1-7 最初にオン、最後にオフする時刻 (週平均)



のであり、午後あるいは夜間から見始める人は少ない。

最後のオフ時刻の場合は、23時台をピークに18時台から24時台にかけて発生している。特に21時台から23時台に多く、23時台までには視聴者の4分の3(74%)がテレビを見終えている。

これらのオン・オフ行動は平日に比べ、土曜、日曜の最初のオンは発生時刻がやや遅く、50%に達するのが8時台にずれこむ。最後のオフも土曜は深夜でやや多く、日曜の23時以降はやや少なく、日曜＝休日にそった行動がみられる。

(4) テレビをつけるタイミング

これまで、オン・オフ行動件数を1時間単位にまとめて分析してきた。それは分析には、ある程度大づかみにまとめる必要があることのほかに、このデータは日記式的特性上、5分刻みの精度に不安があるからである。とはいえ、末尾時刻の5分きざみでオン・オフ行動を簡単にみておく。

まず、目立つことはオンもオフも毎0分が多い、というより行動の約半数を占めること

である。ついで毎30分がぬきんで多く約2割を占める。この2つが行動の7割を占めるのであり、このほかでは毎15分、毎45分、50分、55分などがやや多め程度である。(表1-1)

これは、番組開始時刻が毎0分や毎30分が多いこともあろうが、人々の生活行動は、1時間(あるいは行動によっては30分)を単位として認識されているためではなかろうか。例えば、7時から朝食、8時から出勤、9時から家事…などと、1時間単位で生活行動のリズムができており、その中でテレビが時計の機能を代行している面があると考えられる。

このデータからは末尾分数別での特徴に言及することは適切ではないが、視聴者は1時間、30分、15分単位での時間感覚をもっており、意識としてはそれに即したテレビ視聴行動をしているとはいえそうである。

なお、実際の番組開始時刻の末尾分数は表1-2であり、毎正時を別にすれば、ほぼオン行動の発生件数と近似している。例外は毎55分で、オン行動率より多い。これは5分前後のニュース、お知らせ、ミニ番組が多いためであり、これらの番組をきっかけに見始める人は(少なくとも自覚的には)少ないと考えられる。

表 1-1 末尾分数別発生件数
(件%) (%)

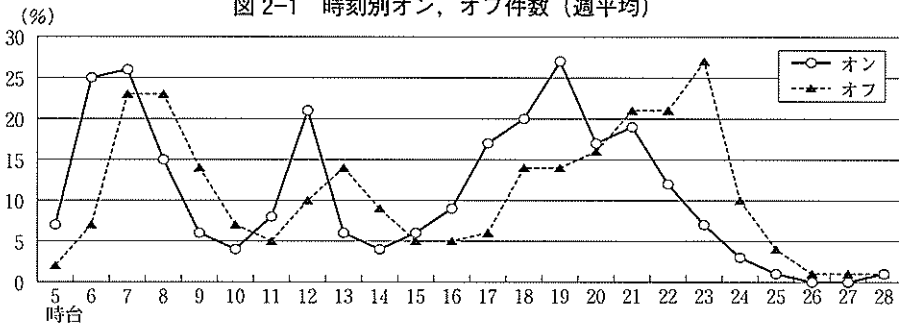
末尾 分数	発生件数		構成比	
	オン	オフ	オン	オフ
0分	128.0	111.7	49.3	43.0
5分	7.1	6.6	2.7	2.5
10分	8.7	9.0	3.3	3.5
15分	11.6	11.6	4.5	4.5
20分	7.8	10.0	3.0	3.8
25分	5.3	6.8	2.0	2.6
30分	50.6	52.5	19.5	20.2
35分	4.3	5.7	1.7	2.2
40分	7.1	8.5	2.7	3.3
45分	9.7	13.4	3.7	5.1
50分	11.0	11.5	4.3	4.4
55分	8.3	12.3	3.2	4.7
計	259.5	259.5	100	100

表 1-2
番組開始時間の末尾分数

開始	番組数	%
0分	446	36.4
5分	58	4.7
10分	52	4.2
15分	64	5.2
20分	36	2.9
25分	51	4.2
30分	227	18.5
35分	21	1.7
40分	28	2.3
45分	70	5.7
50分	54	4.4
55分	118	9.6
計	1,225	100

03年11月関東
教育を除く10分以上
の番組

図 2-1 時刻別オン、オフ件数 (週平均)



2. テレビを見終える

(1) テレビを消す時刻

① 時刻別オフ件数

同様に、オフ時刻もみていこう。オフ行動の発生率も視聴率のピークに遅れる形で7・8時台、13時台、23時台をピークとした動きがみられる。これをオン行動とともに図示すると、両者の動きがほぼシンクロしていることが分かる(図2-1)。すなわち、19時前くらいまでは、オン行動の発生率と同様の動きがほぼ1時間遅れでみられる。これは視聴者が見始めてから1時間程度でオフ=見終わることを示唆する。19時台以降はシンクロするというより、23時台までオフが増加し、24時

台に一挙に減少する。いわばオン時刻と関係なく24時前をめぐりにオフしているかのようにみられる。

男女年層別にオフ時刻をみると、朝の場合、男では7時台でオフが多いのに対し、女では8時台にオフが多いなど視聴時間帯がひろい。これは午後の14時台でも同じことがいえる。夜間については上記のような男女差はあまりみられない。【付表4b】

② 視聴行動の習慣性

われわれは1週間を単位として周期的に生活している。テレビ視聴もこのサイクルの中で行われており、オン行動もオフ行動も習慣

性というか、同一時間に同じ行動をする固定性が認められる。例えば、月曜7時にオンする人は、火曜以降も7時にオンする可能性が高い。勤務時間が固定していれば、その時間のために起床時間や食事時間も固定されるし、その中でテレビを見る時間も固定されるからである。

調査相手ごとに、時刻別にオン行動が1週間のうち何日行われたかを数え、発生日数別の分布を調べた【付表6】。次に時間帯ごとに1日でもオンした人のうち、週3日以上オンした人の割合、つまり固定性が高い人の占める割合を算出し、時刻別に図示したものが図2-2である（オフ行動も合わせて図示）。

オン行動あるいはオフ行動の時刻別の固定性に注目してみると、5時台のオフ行動を別にして朝（5～8時台）はオン行動もオフ行動も固定性が高い。このほかでは12時台と、17～19時台でオン行動に固定性がややみられる。これに対してオフ行動では23時台に固定性がみとめられる程度である。

視聴の習慣性は朝ではみとめられ、昼と夜では習慣性が少ないが、これは朝の生活行動は拘束性が強く習慣性ができ、夜の行動は朝に比べ自由度があるためと考えられる。

③ オン行動とオフ行動にみる時間帯特性

前述のように、オンが多い時間帯は新規の視聴者が多い時間帯であり、オフが多い時間帯は見終わる人、つまり一定時間視聴し続けた人（継続視聴者）が多い時間帯とみてよいだろう。オンとオフの発生率を時刻ごとにプロットしたものが図2-3である。この図はオンもオフも15%の目盛り線で4分割してある。

図の左下部分、つまりオンもオフも少ない領域は視聴が少ない時間帯である。24時台以降の深夜や、9～11時台、13～16時台が当てはまる。朝の5時台はここにあるが、6時台は左上部分に移る。この領域はオンが多く、オフが少なく視聴者が増加していく領域であ

図 2-3 オンとオフの率による時間帯の分類

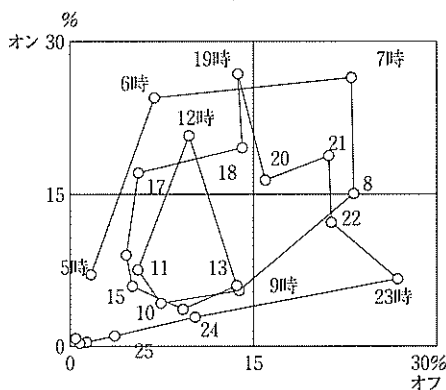
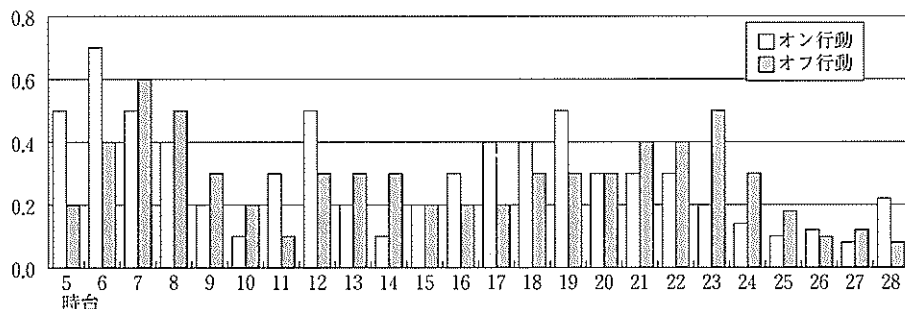


図 2-2 オン、オフの時刻別固定性*



*同一時間帯で1週間に1日以上発生した件数のうち、3日以上発生した割合（比）

る。ほかには12時台、17～19時台で新規視聴者が多くなんらかの要因（例えば、食事時刻、ニュース番組）がある時間帯といえる。

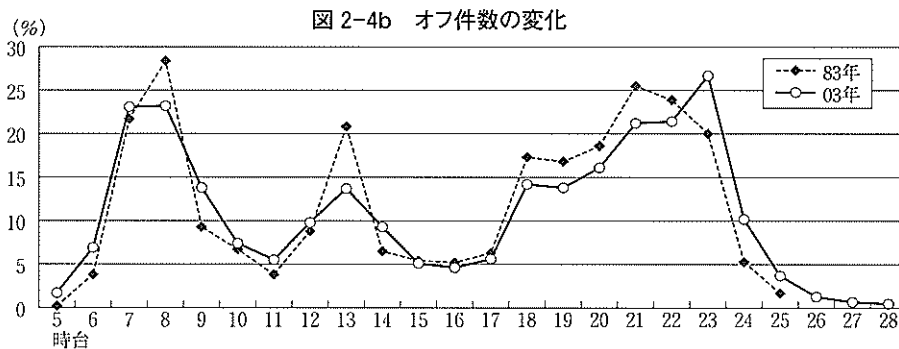
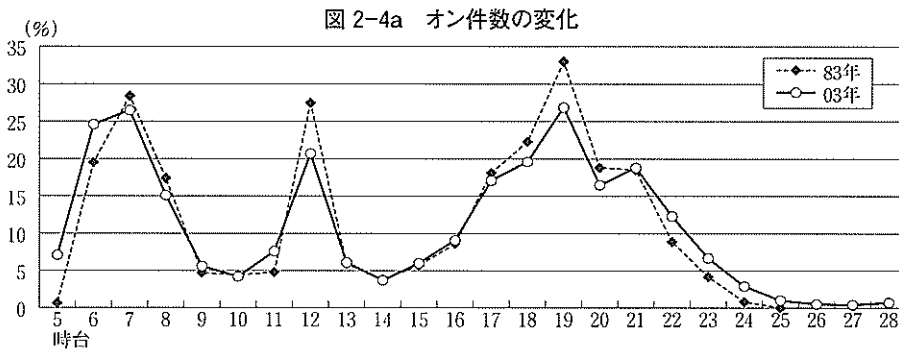
図の右上部分（7時台～19時台）はオンも多いがオフも多い、いわば視聴者の出入りが多い活発な時間である。7時台が最も動きが大きい。これに比べると20時台はむしろ安定した時間ともいえる。8時台、22時台はオンが減って（オフは同程度）視聴者が減る時間帯である右下部分に位置する。23時台はオンも減るがオフが急増し、視聴者は急減し、24時台は左下部分の不活発な領域に入っていく。

このように、視聴率を構成するオンとオフの発生率によって、停滞時間→増加時間→ピーク時間→減少時間→停滞時間というサイクルがみいだせ、視聴率だけではよく見えなかった時間帯特性を明確にできる。

④ オン時刻、オフ時刻の長期的変化

これらのオン・オフ時刻を20年前（83年）と比較してみた（図2-4）。全体的にみると、そう大きな変化があるわけではないが若干の変化はみられる。当時の放送時間はほぼ6時から24時の18時間とみてよい。このため、オン行動は83年に比べ現在は5・6時台が多い。また、22時台以降のオンが増加しており視聴の深夜化傾向を裏づける。このほかでは、オン行動のピークは12時台、19時台と同じだが、発生率が減少している。すなわち、オン行動時間がややばらついてきたといえる。

オフ行動でも同様に、83年には夜のオフのピークが21時台であったのが、現在は23時台へと動き、テレビを離れる時間が遅くなる＝視聴の深夜化が明確にみてとれる。また8時・



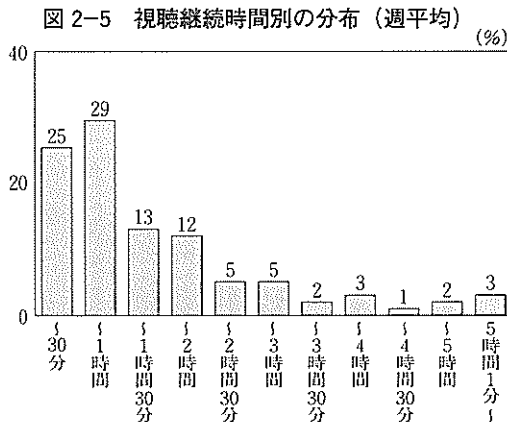
13時のオフピーク時間は変わらないものの、発生率は減少しておりオフ時間もばらついてきた。

(2) テレビを見続ける時間

① 平均視聴継続時間

次に、テレビの視聴時間量をみる。ここでは1回の視聴、つまりテレビを見始め(オン)から、見終える(オフ)までの時間を考える。人々は、1回にどのくらいテレビを見続けるものなのだろうか?これが分かれば、番組の最適の長さ(放送分数)や後に続く番組の長さなど編成する参考にもなる。

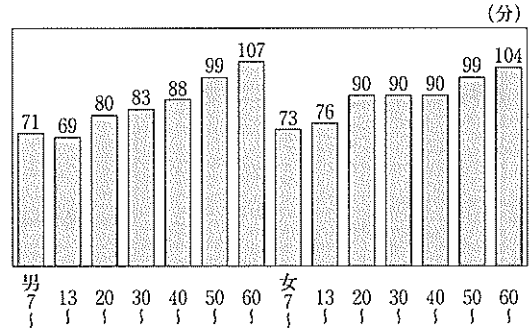
オンからオフまでの時間の平均を求めると1回あたり94分(週平均)であった。この分布をみると、31~60分が最も多く全体の視聴行動の29%、ついで30分以下が25%で両者で半数以上を占める。平均としては約90分であっても中央値はそれより少なく60分程度である。ついで61~90分、91~120分が続きこれらで全体の8割となる。これをみると、2時間以上継続して見ることは少なく、1本の番組としては最大2時間枠が適当なことを示している。(図2-5)



この視聴継続時間を平均し、男女年齢別にみると、視聴回数と同様なことがみとめられる。つまり、年齢が高いほど継続時間が長く、男より女のほうが長い。高年齢層では、視聴回数も多いが、その1回あたりの視聴時間も長く、全体としての1日の視聴時間も長いのである。その逆に、小学生などでは、少ない視聴機会に比較的短い時間しか見ていない。ただ、小学生は1日の視聴時間は少ないが、視聴する時間帯が限られているだけその時間に集中する結果、視聴率でみると大人にはみられない高視聴率がみられる場合がある。

(図2-6)

図2-6 平均視聴継続時間(年齢別、週平均)



② 曜日と時刻別

曜日別に視聴継続時間をみると、平日(90分)に比べ、土(102分)、日(110分)は長い。土日はテレビを視聴する人数は平日より少ないが、見ている人に限れば余暇時間が長いだけに、視聴継続時間も長いのであろう。【付表7a】

視聴継続時間は時刻によっても変わる。視聴継続しやすい時刻としにくい時刻がある。図2-7はオン時刻別に平均視聴継続時間を図示したものである。継続時間が長く2時間をこえる時間は15時から19時台である。15~17時台に2時間をこえる継続視聴がみられ

図 2-7 平均視聴継続時間（視聴開始時刻別、週平均）

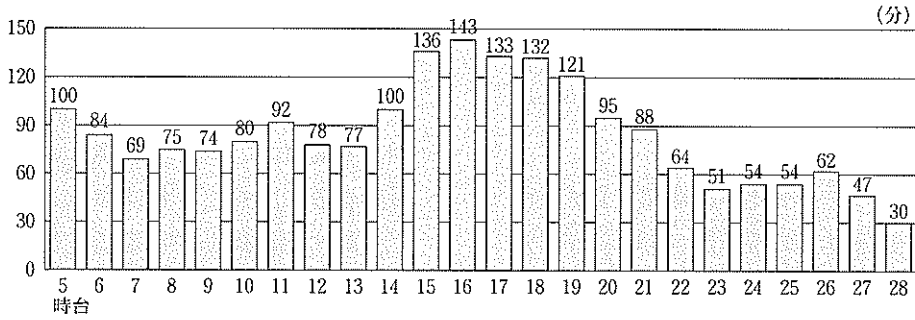
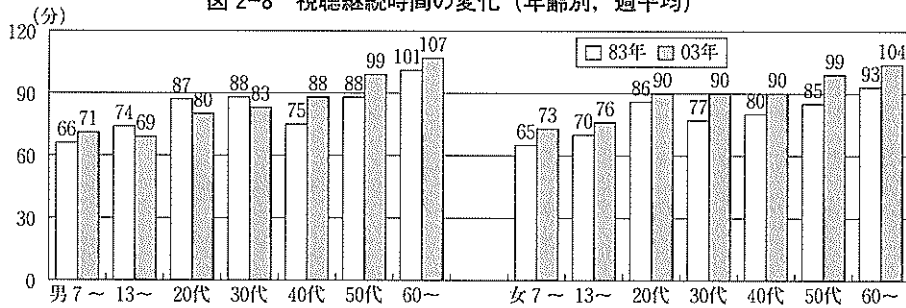


図 2-8 視聴継続時間の変化（年齢別、週平均）



るのは、この調査時期に大相撲中継を含むためである。19時台から2時間の継続視聴は、いわゆるゴールデンタイムをカバーしている。

一方、視聴継続時間が短いのは23時台以降であり、睡眠の必要からテレビ視聴が短いと考えられる。同様に7～9時台、12、13時台も仕事や家事、学校など次の行動への制約のため、比較的短いのであろう。

視聴継続時間が長いオン時刻とは、生活行動に制約の少ない時間帯あるいは制約の少ない視聴層が多い時間といえる。つまり、時間に余裕のある高齢層を中心に5・6時台や15～19時台から見始める人で比較的長く視聴される。

また、視聴率が低い時間帯である5時台と11時台の視聴時間が長いのは7時台、12時台の視聴のピークにむけての「先駆け」を果た

している。同じことは20時台にもあてはまり、ピークにむけて18時台から視聴が開始されている。

3) 20年前に比べ伸びた視聴継続時間

まず、全体の視聴継続時間の平均は20年前では82分であり、12分増加している。これは土日だけ増加したわけではなく、曜日によらない。【付表7】また、年層別にみると、男40・50代と女30代以上で10分程度増加している。男女20代などの若年層は増えてはいない。中高年層を中心としてテレビを長く見るようになった。(図2-8)

開始時刻別にみても、視聴継続時間はほぼどの時間も増加していることがみとれる。特に、8時台、15～18時台での伸びが顕著である。これらは前述のように時間に余裕のある

視聴層に支えられる時間帯であり、そうした中高年層が増加したことも影響しているだろう。なお、24時間放送になったのは80年代後半であり、20年前はまだ深夜の放送は少ない。

他方、番組のワイド化（長時間化）が進行しており、61分以上の番組数は83年の103本から03年には214本に倍増した。番組数に占める割合も5.7%から13.1%に倍増している（表2-1、図2-9、関東）。こうした番組編成の変化も視聴継続時間の増加を支えた要因のひとつとはいえそうである。

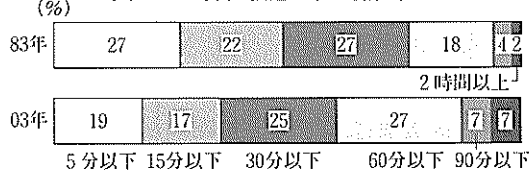
1日の平均視聴時間は20年前（3時間25分、週平均）に比べ40分も伸び、4時間5分となっている。一方、視聴回数そのものは20年前と変わっておらず、視聴時間の増加は個々の視聴継続時間が少しずつ伸びた結果であるといえることができる。

表 2-1 番組放送分数別件数

分数	番組数(本)		構成比(%)	
	83年	03年	83年	03年
～5分	498	304	27.4	18.6
～15	398	276	21.9	16.9
～30	496	402	27.3	24.6
～60	323	441	17.8	26.9
～90	73	106	4.0	6.5
～120	27	91	1.5	5.6
121～	3	17	0.2	1.0
計	1,818	1,637	100	100

関東、教育を除く

図 2-9 番組放送分数別構成比



3. チャンネルを変える

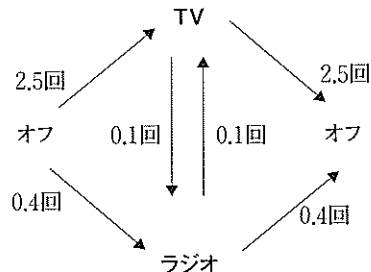
(1) ラジオに切り替える

これまで、視聴行動をチャンネルの選択行動を考慮せず、テレビ全体としてオン、オフ行動をみてきた。それはまず、基本的にテレビに対する行動を押さえておきたかったからである。その上で、チャンネルの選択行動をみていきたい。ただ、その前にチャンネルというより、メディアという言葉のほうがふさわしいと思われるが、ラジオとテレビの切り替えについてみておこう。

① ラジオとテレビ

これまでは、ラジオを聴取していてもオフ（テレビを見ていない状態）として扱ってきた。ここでは、あらためてラジオを聞いている状態「ラジオ」を設定して、「テレビ」、「オフ（テレビもラジオも聞いていない）」の3者の関係をみた。この3者の状態が変わる（他へ移動する）回数をカウントしたものが図3-1である。図ではサンプル数で除して1人あたりの平均行動回数で表記してある。

図 3-1 テレビとラジオの切り替え数（週平均）



これをみると、テレビをオンするのが2.5回に対し、ラジオをオンするのが0.4回である。0.4回とはのべ40%の人がラジオを聞くとい

うことであり少ない数とはいえない。また、テレビからラジオへ、逆にラジオからテレビに移動する人はそれぞれ0.1回(10%)あり、若干の視聴者の入れ替えがあるが、出入り数が高いため、テレビからオフ、ラジオからオフもオンと同じ2.5回と0.4回で変わらない。

テレビとラジオの切り替えは皆無ではないにせよ、あまり大きくない。テレビを見る人の大半はそのままテレビを見るだけである。ただ、ラジオ聴取者は0.4回(40%)と少ないだけに、四分の一にあたる0.1回(10%)の入れ替えの影響は相対的に大きい。

② ラジオとの変更時刻

時刻別にラジオとテレビの入れ替えをみると、最も頻度が高いものでも、テレビからラジオに移る7時台(1.3%)や8時台(1.1%)で、あとはすべて1%未満である。ラジオは仕事や家事をしながら聴かれることが多いメディアであり、この7・8時台は仕事や家事の開始でテレビからラジオに移るためとみられる。逆にラジオからテレビへ移るのが比較的多いのが6～8時台(いずれも0.9%)である。これは早朝からラジオを聞いていた人(例えば5時台のラジオオンは3.1%)が、食事時間などにあわせてテレビにまわることが考えられる。いずれにせよ、テレビとラジオの切

り替えは時刻別にみるとさほど大きくないことは確かである。ラジオはテレビと切り替えせず聴取が完結することが多いといえるだろう。(図3-2)

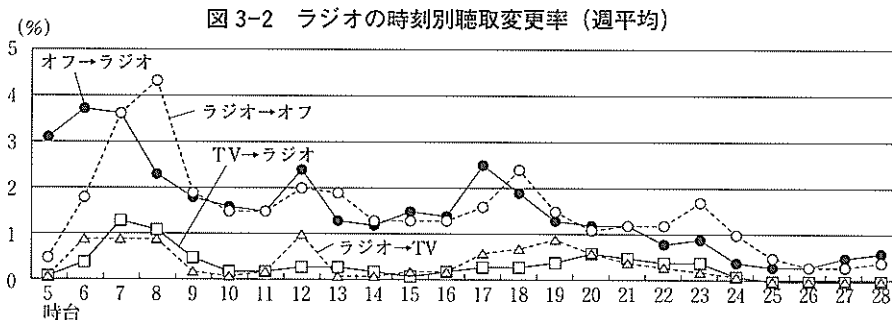
なお、20年前(83年)の1人あたりのラジオを含めた平均視聴行動回数は6.0回で現在と変わらず、テレビ、ラジオ間の変更回数もまったく同じである。この20年のメディアの変化は著しいものがあるが、人々の視聴行動回数という点では変化がみられない。それは行動レベルでは24時間の中で3度の食事や睡眠などの制約があり、人々の生活がそう変わるものではないためであろう。ただ、少数以下のこまかい話になるが、ラジオのオン回数が0.44回から0.37回に減っている。件数でいえば7%にあたるがラジオ聴取の減少がみられる。(表3-1)

(2) チャンネルを変える回数

次に、チャンネルを変更する行動をみていく。前述のようにNHKの視聴率調査の基本

表3-1 テレビとラジオの切り替え数(週平均) (回)

前局 後局	OFF →TV	OFF →R	TV→ OFF	TV→ R	R→ OFF	R→ TV	計
04年	2.51	0.37	2.51	0.08	0.37	0.09	6.01
83年	2.47	0.44	2.49	0.07	0.43	0.09	5.99



は全国調査であり、民放局はまとめて調査している。このため、チャンネル変更をみるために、ここでは民放ネット局別に調査している関東地区のデータでみていく。

その前に、ザッピングについてふれておきたい。ザッピングはリモコンの普及とともに広範囲に行われている視聴行動である。ただし、5分単位の日記式の調査はもちろんのこと、機械調査であっても秒単位の集計は行わないので、ザッピングについて実態を捉えた調査データはほとんど目にできない。

ザッピングは興味ある視聴行動であるが、5分単位のデータでははずさざるをえない。したがって、ここでのチャンネル変更とは、ザッピング後に落ち着いた視聴局への変更とする。

① チャンネル変更回数

調査相手がチャンネルを変更したと意識した時、つまりデータでは視聴チャンネルが変わった件数をカウントしてみる。どの(前)局から、どの(後)局に変わったかの遷移としてまとめ、これを調査相手一人一日あたりの回数(1回は100%に相当)に換算したもの

が表3-2である。なお、オフからオフへの変更がみられるが、これは1日中オフ、つまりテレビを見なかった人の件数(回数=人数)である。

これによれば、オン、オフも含めた視聴行動回数は6.9回であり、そのうちオンが2.7回(オフも同数)であるから、平均的にみれば、純粋にチャンネル間の移動は $6.9 - 2.7 \times 2 = 1.4$ 回(正確には1.44回)となる。ごくおおまかに考えれば、視聴者は1日にテレビを3回つけるが、そのうちの1~2回はチャンネルの変更を1~2回行うといったモデルが想定できる。ここからは、テレビをだだだ見るのではなく、選択的に見ている様子が見える。

このチャンネル間の移動を曜日別にみると、土曜日は視聴回数も少ないが、変更回数も1.1回と少ない。(表3-3) これまでみてきたように、土曜日は視聴者の数そのものが少ないが、見る人は1回の視聴時間が長く、結果的には1日の平均視聴時間は平日を上回る。土曜にチャンネル変更回数が少ないことを合

表3-2 チャンネル変更回数(関東, 1日あたり)

(回)

後局	前局(から)										計
	OFF	総合	教育	NTV	TBS	フジ	朝日	東京	その他	BS	
OFFへ	0.09	0.57	0.08	0.45	0.38	0.54	0.33	0.19	0.05	0.07	2.74
総合へ	0.65		0.01	0.06	0.04	0.05	0.04	0.02	0.00	0.01	0.89
教育へ	0.08	0.02		0.01	0.01	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.13
NTVへ	0.46	0.08	0.01		0.05	0.06	0.04	0.02	0.00	0.01	0.72
TBSへ	0.36	0.05	0.00	0.05		0.07	0.04	0.02	0.00	0.00	0.60
フジへ	0.53	0.07	0.01	0.08	0.06		0.05	0.02	0.00	0.01	0.82
朝日へ	0.29	0.05	0.00	0.05	0.04	0.06		0.03	0.00	0.01	0.53
東京へ	0.16	0.04	0.01	0.03	0.02	0.03	0.02		0.00	0.00	0.31
その他へ	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07
BSへ	0.06	0.01	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.10
計	2.74	0.89	0.13	0.72	0.60	0.82	0.53	0.31	0.07	0.10	6.91

表 3-3 曜日別変更回数 (関東)

(回) 83年

	月	火	水	木	金	土	日	週	週
オン	2.9	2.8	2.8	2.8	2.6	2.5	2.6	2.7	2.6
局間移動	1.6	1.6	1.4	1.6	1.3	1.1	1.5	1.4	1.2
オフ	2.9	2.8	2.8	2.8	2.6	2.5	2.6	2.7	2.6
計	7.5	7.1	7.1	7.2	6.6	6.2	6.7	6.9	6.5

表 3-4 チャンネル変更回数 (関東, 年層別)

(回)

	全体	男全	女全	男7~	20~	40~	60~	女7~	20~	40~	60~
視聴行動数	6.9	6.5	7.4	4.8	5.2	5.8	8.9	5.2	6.4	8.1	8.7
オン	2.7	2.6	2.9	2.1	2.2	2.3	3.4	2.1	2.6	3.1	3.4
局間移動	1.4	1.3	1.6	0.6	0.9	1.3	2.0	0.9	1.3	1.8	1.9

表 3-5 局別チャンネル変更比 (関東, 週間計)

(%)

後局 後局	前局 (から)									
	OFF	総合	教育	NTV	TBS	フジ	朝日	東京	その他	BS
OFFへ	3	64	63	62	63	65	62	60	71	64
総合へ	24	0	10	8	7	5	8	6	7	11
教育へ	3	2	0	1	1	1	1	2	2	1
NTVへ	17	9	7	0	8	7	7	6	4	6
TBSへ	13	6	4	7	0	9	7	6	2	4
フジへ	19	7	4	11	11	0	10	8	4	5
朝日へ	11	5	4	6	6	7	0	10	3	5
東京へ	6	4	6	4	3	3	5	0	7	2
その他	2	1	1	0	0	1	0	1	0	0
BSへ	2	1	1	1	1	1	1	1	0	1
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

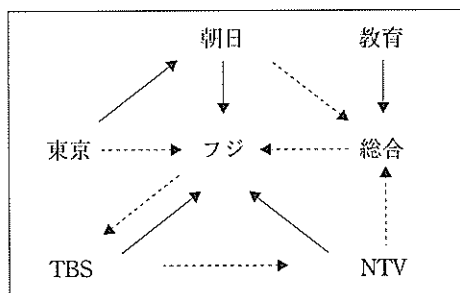
わせて考えると、土曜は同じ局をじっくり見ている人が多そうである。

性年層別にみても、オン行動と同様のことがチャンネル間の移動でもいえる。すなわち、男より女で多いこと、年齢が高いほど多いことなどテレビ視聴の一般的傾向があてはまる。また、当然ではあるが視聴回数(オン)が多いほど、チャンネル間移動回数が増える。若年層はザッピングが多く、チャンネル変更も多いように思われるが、変更回数は逆に少ない。それは小中学生にとっては見たい番組や視聴可能時間が限られるためと考えられる。(表3-4)

② チャンネル変更する局の傾向

平均的には1.4回の変更があるとはいえ、チャンネルによっては変更が少ない、あるいは変更が多いチャンネルがあるのではなかろうか。再度、表3-2にもどってみると、総合、NTV、TBS、フジ間でのチャンネル変更が多いようにみられる。しかし、これらの局はもとの視聴行動回数が多いため変更回数も多いのである。そこで、チャンネルごとの視聴行動総数に対する比率(変更比:%)を求めたのが表3-5である。このうち、変更比が8%以上をとりだして図示したものが図3-3である。

図 3-3 チャンネル変更の割合が多い局



これをみると、各局からフジにむけての変更が目につく。フジはオフからの視聴でも総合(0.7回)に次ぐオン回数(0.5回)があり、同局の吸引力を感じさせる。もうひとつは、フジほどではないが、教育、朝日、NTVから総合への変更がみられる。前述のNHKと民放の間での変更、あるいは民放間での変更は、具体的にはフジを中心とした動きといえる。ただしフジや総合への変更が多いといっても、視聴時の1割程度の変更発生率であって、そう強力な吸引力というわけでもない。

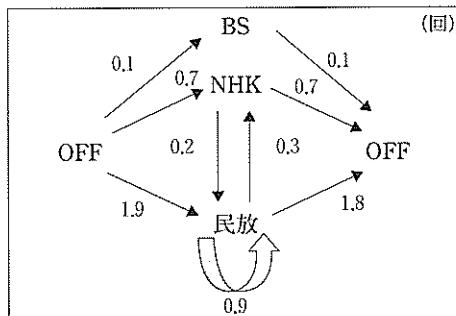
③ 衛星と地上の切り替え

前述の表3-2はチャンネル数が多く、数値も小さいので、これを衛星と地上NHK、地上民放にまとめ(表3-6)、さらに図示したものが図3-4である。1日の視聴回数としては、オフから地上NHK(以下NHK)に0.7回、地上民放(以下民放)に1.9回に対し、衛星には0.1回と衛星視聴回数はきわめて少ない。またNHKや民放から衛星へ、あるいはその逆の切り替えはほとんどみられず、衛星を視聴した場合はそのままオフしている。これはNHK教育や「その他民放」など視聴の少ないチャンネルでも同様であり、その局だけ選択的に見ているようであり、衛星だけの特

表 3-6 チャンネル変更回数(関東,地上,衛星) (回)

		前局				計
		OFF	NHK	民放	BS	
後局	OFF	0.09	0.73	1.84	0.06	2.73
	NHK	0.65	0.03	0.32	0.01	1.02
	民放	1.92	0.25	0.86	0.02	3.05
	BS	0.07	0.01	0.02	0.00	0.10
計		2.73	1.02	3.05	0.10	6.91

図 3-4 チャンネル変更回数(関東地上/衛星)

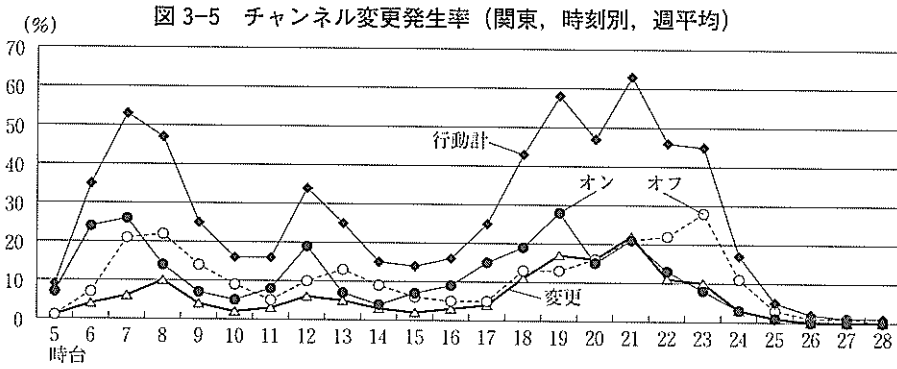


徴とはいえない。

この図で目立つのは民放間のチャンネル変更(0.9回)である。民放視聴者の半数近くは他の民放局に変更している。NHKと民放間の変更(民放へ0.2回、民放から0.3回)は少ないように見えるかもしれないが、民放間の変更でも民放は5局あることを考えれば、1局あたり0.2回程度であり、ことさら少ないわけではない。NHKの場合もオフからの視聴者(0.7回)の半数弱(0.2回)が民放に移っている。ここでも確率的にみると2回見れば、そのうち1回は他チャンネルに移るとよみとれる。

(3) チャンネルを変える時刻

では、チャンネル変更はどの時刻に多いのだろうか。時刻別に、オン、オフを含めてチャンネル間移動の発生率をみた(図3-5)。チャンネル移動は前述のように平均1.4回(合



計144%)程度であり、そう高い頻度で行われるわけではない。朝は視聴のピークを過ぎた8時台にチャンネル変更のピークがみられる。この時間はオフのピークであり、視聴のピークが終わって視聴をやめる人とチャンネルを変えて見続ける人に分かれる時間帯なのであろう。昼のピーク後の13時台も同じ意味あいであろう。

夜間については若干様相が異なる。チャンネル間移動のピークは21時台だが、オフのピークは2時間後の23時台である。これは19時台のピークを形成するようにテレビを見始めた(オンした)人が19時台から21時台にかけて、次の番組を見始めるためにチャンネルを変えるためだと考えられる。

オフ行動のところでも述べたが、オン行動とオフ行動の発生率は一定の間隔で平行移動しているようにみえる。この図3-5でみると、朝から日中にかけては、ほぼ1時間の間隔でズレがみられるが、夜間に関しては2~4時間の間隔がみられる。これだけ長い視聴継続時間であるから、途中で視聴番組(チャンネル)の変更が生じるのであり、時間的には21時台前後ということになる。

21時台という時間はユニークな時間である。まず、仕事や家事などで遅くなった人で、オンの2度目のピークがある。他方、この時間から23時台へのオフのピークが始まる。これらと同時に、チャンネル移動のピークでもある。つまり、新規視聴者、チャンネル変更視聴者、視聴終了者という性格の異なる視聴者が混然となっている。また、この結果、21時台は1日の中で視聴変更行動の最も多い(合計63%)時間帯になっている。

(4) 同一チャンネルの視聴継続時間

最後に、チャンネル移動までの視聴継続時間をみておく。さきにみたテレビ視聴継続時間はチャンネル間移動に関係なく、オンからオフまでの時間であった。ここではオン、オフも含めチャンネル変更までの視聴時間をみる。いわば同一チャンネルを維持継続して見る時間といってもよいであろう。

チャンネル変更するまでの視聴継続時間を算出すると60分(週平均)であった。これは、土(67分)日(65分)が平日(57分)より長めであるが、およそ60分という目安は変わらない。性年層別にみても、若年層が50分前半、50代以上が60分台と多少差がみられるが、ここでも、おおよそ60分といえるだろう。つま

り、平均的にみると同一チャンネルの視聴継続時間にあまり大きな差はみられない。

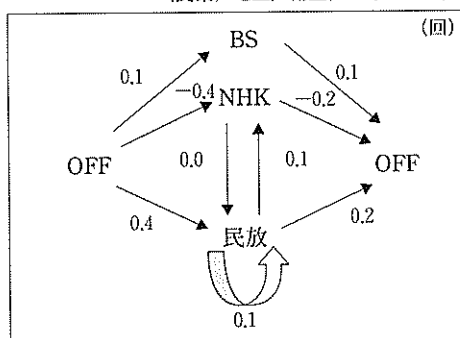
また、視聴している局別にみても、教育テレビでの視聴継続時間が少ないことを除けばほぼ60分前後で変わらず、視聴局によって差が生じるとはいえない。ただし、視聴開始時刻別にみると14～16時台と19・21時台は70分をこえるし、24時台以降は50分を下回るものもある。夕方からオンする人は時間的なゆとりがある人だろうし、深夜では時間の制約があるためであろう。若年層より中高年層が長いことや平日より土日が長いことなど、チャンネル継続時間は、番組そのものの長さの他に時間的な自由度と関係がありそうである。【付表11】

(5) チャンネル変更行動の変化

チャンネル変更の点では20年前とどう変わったのだろうか。まず、視聴行動回数全体は6.5回から6.9回にわずかに増加している。このうち、オン回数（したがってオフ回数）の増加で0.2回増加し、チャンネル間移動は1.2回から1.4回に0.2回増加した。細かい数字であるが、これには次のような変化がみられる。

(図3-6)

図3-6 チャンネル変更回数の変化
(関東、地上/衛星、83年との差)

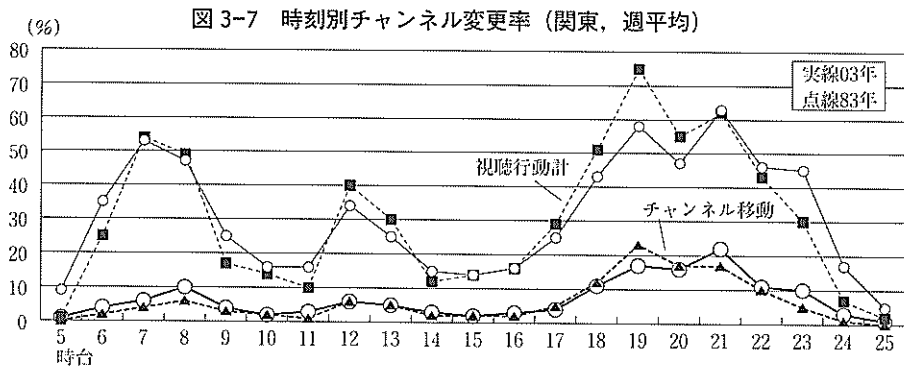


まず、20年前にはなかったBSの視聴(オン)回数は0.1回程度である。BSはNHKや民放の地上波間との切り替えも少ないことから、既存地上波にあまり影響せず単純にBSを見る回数が増えたと考えられる。なお、全体の回数は変わらないがNHKへのオンが0.4回減り、その分、民放へのオンが増えている。

次に、チャンネル間移動で0.2回増えているが、これは民放間の移動と民放からNHKへの移動である。つまりNHKへのオンは民放へのチャンネル移動につながっていなかったのが、民放へのオンが増加した結果、それが民放およびNHKへのチャンネル移動増にまわったのであり、移動回数の増加というより、NHK、民放の視聴回数の変化とみたほうが適切である。

時刻別のチャンネル移動では、20年前にはそのピークが19時台であった。もちろん、視聴行動のピークも19時だった。これらのピークは現在21時台に移り、21時以降の遅い時間帯での視聴にむけたチャンネル選択が行われている。(図3-7)

チャンネル移動までの継続時間は現在は平均60分であるが、当時は53分とやや少ない。増加は全般的にみられるが、特に目立つのは曜日では土曜(57分→67分)、年層では小学生(男41→53分、女39→50分)である。また、時間帯では16～19時台で13～14分増加している。視聴継続時間は長時間番組の増加とも関係あるだろうが、同じチャンネルの番組を続けて見るが多くなったとも考えられる。16～19時台は(20年前も)大相撲中継はあるが現在は1時間枠の番組が大半であるから、



平均で60分をこえる継続視聴は同じチャンネルを長く見続ける傾向をうかがわせる。(表 3-7)

チャンネル間の移動についてみると、現在はフジへ向けて移動する傾向がみられたが(図 3-3)、20年前はもう少し相互の切り替えが多かった。図 3-8 はこれと同じ条件で作成したもののだが、各局間の相互移動の様子がみてとれる。

これとは別に、NHK総合で見終わる率が78% (チャンネル変更比0.91回/1.17回) と高かったことが注目される。逆にいえば、総合から移動する率が22%と少なく、固定性が強かったが、現在は他の局と同程度(64%)である。

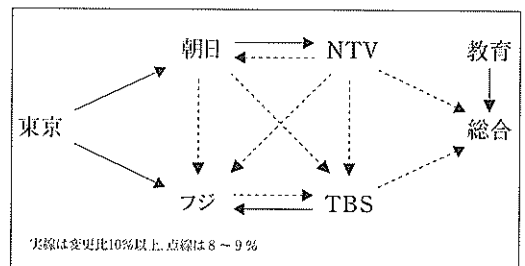
これらチャンネル変更行動の変化からは、既に視聴率の分析で明らかにされていることだが、総合から民放への視聴者の長期的移動がうかがえる。例えば20年前の総合テレビは朝の占拠率が7割もあったが、民放は徐々に視聴者を増やし、現在の朝は民放全体の占拠率が7割にせまっている。というより、視聴者の意識も視聴者自身も変化し、7割をこえる占拠率が生じる時代ではなくなったといえるのだろう。

表 3-7 チャンネル変更までの視聴継続時間 (関東)

【7a曜日別】 (分)		【7b男女年齢別】 (分)		
	03年	83年		
月	57	50	週平均	53
火	57	50	男7歳~	41
水	56	52	男13~	48
木	58	53	男20~	53
金	59	53	男30~	54
土	67	57	男40~	53
日	65	60	男50~	57
週平均	60	53	男60~	65
			女7歳~	39
			女13~	48
			女20~	56
			女30~	52
			女40~	54
			女50~	56
			女60~	66

【7c前局別】 (分)	
週平均	03年 83年
総合	59 52
教育	47 42
NTV	58 53
TBS	58 55
フジ	64 57
朝日	60 56
東京	58 47
その他	63 51

図 3-8 チャンネル変更の割合が多い局(関東, 83年)





Ⅲ 視聴行動分析の有効性

これまで視聴回数と視聴継続時間を中心に視聴行動をみてきた。おわりに、これらの行動分析を再検討することで、本稿のまとめとしたい。本稿は、冒頭で述べたように、視聴率では把握できない視聴者の動きを捉えることを目的にしている。これによって容易に視聴者をイメージできるようになったのだろうか。そして、視聴率ではなく、あえて別の指標を導入する効果があったのだろうか。これらの点について考える。

1. 視聴行動の知見

これまで視聴率の分析からは得られず、今回の分析で明らかになったおもな知見は以下である。

- 1) 人々がテレビを見る回数は2～3回(平均2.6回)である。
- 2) チャンネルを変更する回数は1～2回(平均1.4回)である。
- 3) 1度テレビを見始めると平均94分視聴が続く。ただし、途中でチャンネルの変更があるので、同じチャンネルを見続ける時間は平均60分である。
- 4) テレビを見始める時、(関東では)総合、フジが選ばれることが多い。
- 5) 衛星と地上放送とのチャンネル変更は0.1回で、あまり多くない。
- 6) テレビを見始める時刻は6時台など視聴率のピークより前の時間に多く、見終わる時刻は23時台などピークより後ろの時刻に多い。チャンネル変更が多い時刻は21時台である。

- 7) 21時台はテレビを見る人、見終わる人も多く、視聴者の動きが最も多い時間帯である。
- 8) 3分の2の視聴者は8時台までにテレビを見始める。そして大半(75%)の視聴者は23時までにテレビを見終えている。

20年前の比較では以下にまとめられる。

- 9) 視聴回数はほとんど変わってない。
- 10) ただし、1回あたりの視聴時間が平均12分増加しており、1日の視聴時間は合計40分増加している。つまり回数は増えず、視聴時間が増えた。
- 11) テレビのオン、オフする時刻は早朝や深夜で増え、逆にピーク時刻で減っている。24時間放送の結果、視聴がややばらついたと考えられる。
- 12) チャンネル変更回数は関東でみるとやや増えたが、これは民放の視聴が増えた結果、変更も増えたためである。CSやCATV局などの影響は少ない。

2. 視聴行動分析の指標

次に、今回の分析で用いた指標についてみていく。今回は指標として、視聴回数と視聴継続時間を中心に据えている。回数も時間も日常的な概念であり容易にイメージできる指標である。

(1) 視聴回数(オン、オフ、チャンネル変更)

人々がテレビを見始めるオン回数は2～3回(平均2.6回)である。これは、朝、昼、夜の視聴率のピークを中心に1日2～3回オンすると考えられる。ザッピングが含まれないことや、テレビから一時的に離れる場合は記録されないだろうから、テレビを見始めるオ

ン回数としては妥当である。しかし、そうだとすると、あまりに当然であり、あらためて新しい指標を持ち出すまでもない。また、高年層ほどオン回数が多いが、これは視聴時間（視聴率）でも同様であり、視聴量を示す指標としてより有効というわけでもない。

チャンネル変更回数も1～2回(平均1.4回)であり、ザッピングが含まれないためか、少ない感じがする。ただし、オン行動は2～3回であり、平均4時間の視聴の中で1時間番組を見ると1～2回の変更は不自然ではない。視聴時間の少ない若年層で変更が多いというような傾向はみられず、チャンネル変更回数も指標としては視聴回数と同様、高い評価はできない。

また、回数概念は日常的なのだが、平均値となると考えにくい。上記のチャンネル変更回数平均1.4回の場合でいえば、チャンネル変更の総件数が計算上140%相当ということである。これは、一人の視聴者にとっては1回か2回くらい、という読み替えが必要である。さらに、衛星放送(オン0.1回)やラジオ(オン0.4回)のように平均が1回未満だと確率的な想像力が必要となり、かえってイメージしにくい。発生件数がもっと多い行動に適していると考えられる。

(2) 視聴継続時間

平均時間は平均回数とちがって連続量であり実感しやすい。テレビを見始めた時の平均視聴継続時間の94分や、同じチャンネルを見続ける時間の平均60分は日常的感觉とも合っている。ただ、この指標の難点は、その行動(例えばオン)をした人だけでの平均(行為者平均)という点にある。その行動をした人が

少ない場合は、全体の(その行動をしていない人を含めた)平均と乖離する。

もうひとつの難点は、時間量は長時間視聴の人がいるため、ばらつきが大きく平均値から視聴者イメージをつくりにくい。オンからの平均視聴時間は94分であるが、標準偏差も92分と大きく、むしろ中央値(60分)のほうが視聴者イメージとしては適している。

これらの点に配慮すれば、視聴継続時間は集計も容易さも含め使いやすい指標であり、本稿でも基本視聴行動ごとに、さらに男女年層別や視聴局ごとなど広範囲に使用した。

(3) 視聴行動発生率

オン回数はオン行動の発生件数を調査相手数で割って算出している。いわばその行動の発生率と同義である。本稿では視聴行動がどの時間で生じるのかをみるため1時間単位で発生率を算出した。オン発生率、オフ発生率、チャンネル変更率(図2-2など)がそれにあたる。これは、まさに視聴行動の率なのではあるが、1時間単位にまとめると、1時間ごとの視聴率に近似してくる。極端に言えば5分ごとに変化の発生率と現状維持率をあわせれば、視聴率と一致してしまう。

もとはといえば平均視聴率という代表値を2ないし3つの要素に分解して詳細を示したにすぎない。せっかく平均=集約したのに、分割しているわけである。視聴者イメージを深める点では有効かもしれないが、イメージを形成する段階では複数の要素をとりこむことになり、必ずしもイメージしやすいというわけではないだろう。ただ、この場合の指標は率(%)であり、前述の回数や時間という指標と異なり視聴率との関連や比較をみるの

に便利である。今回の分析の中では、最初にオンする時刻、最後にオフする時刻は視聴率からは得られない知見であり、視聴者イメージの形成に直接役立つであろう。

(4) 時系列比較

今回の分析では、おもな指標について20年前の同じ指標と比較し、20年の変化をみようとした。しかし、これまで述べたように、驚くほど変わっておらず、基本的には視聴行動は変わっていないといえそうなほどである。もちろん、早朝や遅い夜の視聴が増えたことや、民放の視聴が増えた様子うかがえる。しかし、1日の視聴回数やチャンネル変更回数、その視聴継続時間や男女年層別の傾向など、メディア状況が激変したといわれる割には、小さな動きしかみられない。

それは、これまでもいわれてきたことだが、テレビ視聴行動は生活にとけ込んだ生活行動の一部であり、生活行動が変わらない限り視聴行動だけ変わることはないからであろう。24時間の中で、3回の食事と睡眠や労働などは多少の増減はあっても、20年前でも現在でも変わらず存在する生活行動である。こうした生活に関連して、あるいは制約されて行われる視聴行動はそう変わらないのである。

こうした意味では、そもそも今回の指標による視聴行動の時系列分析はあまり変化を期待できないのかもしれない。あるいは小さな変化であっても、それは生活行動の変化を暗示するものとして、もっと評価検討すべきものなのかもしれない。

3. 今後の課題

以上のように、視聴回数や視聴継続時間な

ごによる視聴行動の分析は必ずしも便利で分かりやすいといえないが、視聴率分析の補完として有意義であるとはいえよう。最後に、今後に向けた課題を3点あげて、本稿を終わる。

第1は番組内容との関連である。本稿では、行動という側面でのみ分析しており、視聴が変化する要因として、せいぜい時刻しか取り扱えなかった。もちろん、テレビ視聴は時刻という変数と関係しているが、番組の内容を抜きにテレビ視聴は語れない。どのような番組内容の時にチャンネルは変えられやすいのか、どんな番組種目だと継続視聴時間が長いのか、どんな番組とどんな番組が続けて見られやすいのか、など番組内容との関連が求められる。

第2は、視聴態様との関連である。本稿では視聴行動の変化に着目し、「オン」「オフ」「チャンネル変更」という3つの基本視聴行動を統合的に定義し分析した。しかし、これらは外観だけの行動分析であり、内容や方向性をもった行動つまり視聴態様との関係性が次の展開として求められよう。例えば「ひとりで見たいほう」の人と「ほかの人と見たいほう」の人では、基本視聴行動がどのように異なり、そしてなぜなのか、などの分析が期待される。そうすることで、単なる行動にその背景としての傾向や特性が付加され、視聴行動の構造的な理解が深まることになる。

第3はザッピングの把握である。繰り返しになるが、この分析は5分単位の日記式データによるもので、ザッピングの捕捉はなじまない。ザッピングは時間的にはわずかなため、

番組視聴率への影響はあまりないが、番組の選択のしかたや番組の見方に大きな影響を与えていると考えられる。つまり、ザッピングが多い人と少ない人では、テレビの見方(視聴時間や視聴内容)が異なっていると考えられる。ザッピングの行動調査は難しいだろうが興味深い。

本稿は、視聴率では捉えられない視聴者の動きを明らかにしようとしたものである。それが十分達成できたとは思われないが、少なくともその一部のデータででも、番組編成を考える上での参考になれば幸いである。

(かみむら しゅういち)

参考文献

安井康夫1979「視聴行動の諸相」(『文研月報1979年6～9月号』)
 吉田潤1979「視聴率データの分析と利用～視聴行動の諸相をめぐって」(『文研月報1979年10月号』)
 NHK放送文化研究所1984「テレビ・ラジオの視聴の現況(昭和58年11月)」(『文研月報1984年2月号』)
 石川旺1986「多チャンネルCATVと視聴行動の変容」(『文研月報1986年12月号』)
 パーワイズ、エーレンバーク1988, 田中義久他訳「テレビ視聴の構造」
 東大社会情報研究所1993「多チャンネル化と視聴行動」
 東大社会情報研究所2001「日本人の情報行動2000」
 NHK放送文化研究所2003「テレビ視聴の50年」
 NHK放送文化研究所2004「テレビ・ラジオの視聴の現況(平成15年11月)」(『放送研究と調査2004年2月号』)

調査の概要

	2003年調査	1983年調査
調査日	11月17日(月)～23日(日)	11月14日(月)～20日(日)
調査相手	全国7歳以上3,600人	同左
調査方法	配付回収法(時刻目盛り日記式)	同左
有効数(率)	2,567人(71.3%)	2,981人(82.8%)

サンプル数とサンプル構成

		2003年				1983年			
		全国	%	関東	%	全国	%	関東	%
男	7歳～	87	3.4	23	2.8	169	5.7	59	6.6
	13歳～	107	4.2	29	3.5	161	5.4	55	6.1
	20代	120	4.7	48	5.9	175	5.9	62	6.9
	30代	168	6.5	59	7.2	264	8.9	76	8.4
	40代	175	6.8	48	5.9	248	8.3	78	8.7
	50代	242	9.4	74	9.0	223	7.5	50	5.6
	60～	342	13.3	126	15.4	151	5.1	36	4.0
	男計	1,241	48.3	407	49.8	1,391	46.7	416	46.2
女	7歳～	76	3.0	22	2.7	160	5.4	51	5.7
	13歳～	101	3.9	33	4.0	194	6.5	64	7.1
	20代	155	6.0	56	6.8	185	6.2	59	6.6
	30代	207	8.1	68	8.3	322	10.8	97	10.8
	40代	178	6.9	48	5.9	249	8.4	79	8.8
	50代	228	8.9	74	9.0	230	7.7	71	7.9
	60～	381	14.8	110	13.4	250	8.3	63	7.0
	女計	1,326	51.7	411	50.2	1,590	53.3	484	53.8
	全体	2,567	100.0	818	100.0	2,981	100.0	900	100.0

付表1 視聴回数の分布 (曜日別)

(%) 83年

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
0回	7.3	8.0	9.4	8.8	8.8	11.6	12.5	9.5	7.1
1	12.6	14.3	14.5	14.0	16.8	17.3	17.4	15.2	17.6
2	29.0	28.4	28.3	29.0	28.3	28.4	26.3	28.3	27.6
3	23.1	23.1	22.7	23.6	22.8	21.2	21.9	22.6	24.0
4	14.0	14.1	12.7	12.6	12.3	13.0	11.7	12.9	13.5
5	7.1	6.2	6.1	6.0	5.9	4.5	5.4	5.9	6.4
6	3.4	3.3	3.6	3.3	2.9	2.5	2.8	3.1	2.5
7	1.6	1.2	1.3	1.5	1.2	0.7	1.0	1.2	0.9
8	0.8	0.8	0.7	0.6	0.5	0.3	0.4	0.6	0.2
9	0.5	0.3	0.3	0.4	0.3	0.3	0.2	0.3	0.1
10以上	0.6	0.3	0.5	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.1
平均(回)	2.8	2.7	2.6	2.6	2.6	2.4	2.4	2.6	2.5
SD	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.6	1.7	1.7	1.5

付表2 平均視聴回数 (年層別)

(回) 83年

年層	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
男7~	2.3	2.2	2.2	2.2	2.1	1.9	2.0	2.1	2.2
13~	2.0	1.8	1.7	1.8	1.8	1.8	1.6	1.8	2.1
20~	2.1	2.0	1.9	1.9	1.8	1.7	1.8	1.9	2.0
30~	2.1	2.1	1.9	2.1	2.0	2.1	2.0	2.0	2.0
40~	2.2	2.2	2.2	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	2.4
50~	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.4	2.4	2.5
60~	3.5	3.4	3.4	3.5	3.3	3.2	3.2	3.3	3.2
男全	2.6	2.5	2.4	2.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.3
女7~	2.0	2.0	1.9	1.8	2.1	1.8	1.8	1.9	2.2
13~	2.2	2.0	2.0	1.8	1.8	1.8	1.8	1.9	2.0
20~	2.6	2.4	2.1	2.2	2.1	1.8	1.8	2.1	2.4
30~	2.7	2.7	2.7	2.7	2.6	2.1	2.0	2.5	2.5
40~	3.2	3.0	3.0	2.9	2.9	2.5	2.7	2.9	2.7
50~	3.2	3.0	3.1	3.0	2.9	2.5	2.6	2.9	3.0
60~	3.7	3.4	3.3	3.4	3.2	3.1	3.1	3.3	3.2
女全	3.0	2.9	2.8	2.8	2.7	2.4	2.4	2.7	2.6
全体	2.8	2.7	2.6	2.6	2.6	2.4	2.4	2.6	2.5

付表 3a 時刻別視聴開始(オン)数

(%) 83年

時刻	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
5時台	8.8	8.4	7.8	7.8	7.5	5.5	3.8	7.1	0.6
6時台	29.7	29.0	27.7	28.6	27.7	17.6	11.9	24.6	19.5
7時台	30.0	28.9	28.6	27.7	27.6	21.6	21.0	26.5	28.4
8時台	14.5	13.4	14.9	13.9	13.7	18.2	16.8	15.1	17.4
9時台	5.0	4.4	4.6	4.0	4.1	7.0	10.1	5.6	4.7
10時台	4.2	3.2	3.2	4.2	2.9	4.5	7.6	4.2	4.4
11時台	8.9	7.8	7.6	7.5	7.4	6.9	7.2	7.6	4.8
12時台	22.7	20.5	19.7	21.5	20.7	20.4	19.5	20.7	27.5
13時台	6.1	6.1	6.3	6.2	5.4	5.4	6.8	6.1	5.9
14時台	3.5	3.2	3.3	3.3	3.5	4.7	4.1	3.7	3.8
15時台	6.6	5.2	5.6	6.7	5.4	5.0	7.3	6.0	5.7
16時台	10.4	9.8	9.8	8.7	7.8	8.0	8.9	9.1	8.6
17時台	17.3	17.6	16.9	17.1	17.1	16.4	17.4	17.1	18.1
18時台	21.8	19.6	19.2	19.3	19.0	17.1	21.2	19.6	22.3
19時台	29.9	29.1	25.6	26.5	25.6	26.3	25.0	26.9	33.0
20時台	17.0	19.1	19.0	16.8	16.1	11.5	16.0	16.5	18.8
21時台	17.6	19.6	20.3	17.7	17.5	21.8	17.2	18.8	18.5
22時台	14.2	11.4	13.7	15.4	12.4	9.8	9.0	12.3	8.9
23時台	6.9	7.1	5.6	6.7	8.1	6.7	5.7	6.7	4.2
24時台	2.5	2.8	2.8	2.8	3.1	3.2	2.8	2.9	0.8
25時台	0.9	0.9	0.9	0.9	1.3	1.1	1.0	1.0	0.0
26時台	0.3	0.8	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	—
27時台	0.4	0.3	0.2	0.2	0.6	0.6	0.4	0.4	—
28時台	1.1	0.8	0.8	0.7	0.8	0.3	0.6	0.7	—
計	280	269	264	265	256	240	242	259	256

付表 3b 時刻別視聴終了(オフ)数

(%) 83年

時刻	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
5時台	2.5	1.6	1.7	1.6	1.7	1.6	1.5	1.7	0.2
6時台	9.0	8.2	8.0	8.1	7.3	4.7	3.2	6.9	3.8
7時台	28.5	28.1	27.6	27.4	27.0	14.0	8.8	23.1	21.7
8時台	27.3	25.5	25.2	24.0	24.6	20.9	15.1	23.2	28.4
9時台	13.3	13.0	12.9	13.1	12.2	15.9	16.3	13.8	9.3
10時台	6.8	5.9	6.2	6.0	6.0	9.0	12.2	7.4	6.7
11時台	4.2	4.6	4.6	4.9	4.6	6.0	9.3	5.5	3.8
12時台	11.3	10.0	10.3	10.2	10.4	8.4	7.6	9.8	8.8
13時台	15.3	13.2	12.4	14.1	12.2	14.5	14.1	13.7	20.8
14時台	9.5	9.3	8.7	8.9	9.2	8.3	10.8	9.3	6.5
15時台	5.5	5.0	5.0	5.3	4.7	4.5	6.0	5.1	5.4
16時台	4.7	3.8	4.4	5.1	3.8	5.4	4.8	4.6	5.2
17時台	6.3	5.7	6.0	4.9	5.2	4.9	6.3	5.6	6.3
18時台	14.8	14.1	13.9	14.1	13.9	13.9	14.4	14.2	17.3
19時台	14.0	13.1	14.1	14.6	12.8	13.4	14.3	13.8	16.8
20時台	18.1	17.8	16.0	15.2	16.2	14.2	15.2	16.1	18.6
21時台	24.2	22.1	22.3	22.1	20.4	16.7	20.6	21.2	25.5
22時台	21.7	25.2	23.7	19.9	18.5	17.3	23.7	21.4	23.9
23時台	28.1	25.7	27.5	29.1	27.0	26.8	22.8	26.7	20.0
24時台	10.1	10.4	8.1	10.7	11.4	11.9	9.0	10.2	5.3
25時台	2.8	3.5	3.6	3.6	4.0	5.1	3.2	3.7	1.7
26時台	1.2	1.3	1.1	0.9	1.7	1.5	1.6	1.3	—
27時台	0.7	0.9	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.7	—
28時台	0.4	0.7	0.4	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	—
計	280	269	264	265	256	240	242	259	256

付表 4a 時刻別視聴開始(オン)数(年層別)

(%)

時刻	男7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~	女7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~
5時台	1	1	3	5	7	10	14	1	3	4	5	9	5	11
6時台	20	14	15	21	28	31	29	23	17	14	24	34	28	25
7時台	40	27	19	25	25	23	29	33	24	19	26	25	30	29
8時台	5	5	8	13	8	9	19	6	6	13	19	18	20	26
9時台	3	3	4	4	3	4	7	2	4	8	7	6	7	7
10時台	1	2	4	3	2	3	7	1	4	5	4	3	4	7
11時台	1	2	3	4	4	5	18	1	3	6	5	8	6	14
12時台	2	5	11	12	17	18	32	3	4	17	16	23	25	37
13時台	1	2	4	4	2	2	7	1	2	8	10	9	10	9
14時台	1	1	1	2	2	2	6	0	3	2	4	5	5	6
15時台	3	2	2	2	2	5	15	3	3	4	4	5	5	10
16時台	7	3	3	5	3	4	20	9	5	5	8	8	7	16
17時台	23	9	8	7	10	17	29	23	11	6	12	15	18	26
18時台	31	17	14	12	15	18	23	26	14	15	19	22	20	24
19時台	39	23	19	21	23	26	28	34	28	22	24	29	32	30
20時台	17	14	14	16	16	15	18	13	19	12	16	21	16	18
21時台	13	18	20	19	21	19	18	10	18	20	21	22	21	18
22時台	4	14	16	14	14	13	9	2	13	14	14	14	17	10
23時台	0	10	13	10	9	6	4	1	5	11	8	7	8	4
24時台	0	4	7	4	3	2	2	0	4	6	4	2	3	2
25時台	0	2	2	2	1	1	1	0	1	3	1	1	1	0
26時台	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1
27時台	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
28時台	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	1
計	213	179	192	204	213	235	335	193	190	215	251	288	291	330

付表 4b 時刻別視聴終了(オフ)数(年層別)

(%)

時刻	男7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~	女7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~
5時台	0	0	0	1	2	1	3	0	1	0	0	1	1	1
6時台	4	4	5	6	8	10	10	2	6	5	6	7	6	7
7時台	40	29	19	27	29	30	21	39	26	15	19	24	19	16
8時台	15	11	15	19	19	19	29	11	14	15	28	29	31	31
9時台	5	3	5	6	7	9	20	8	3	13	17	20	20	23
10時台	5	2	2	5	3	5	9	4	4	7	9	8	10	13
11時台	1	1	4	3	2	4	8	1	3	6	5	5	6	10
12時台	1	1	7	9	10	11	20	1	2	7	8	11	8	12
13時台	1	5	8	8	10	11	21	2	5	11	10	16	18	24
14時台	1	2	4	3	2	4	13	1	2	9	12	12	12	20
15時台	1	1	1	2	2	3	9	1	2	5	5	6	7	9
16時台	3	3	2	2	2	2	8	3	3	3	4	5	6	7
17時台	8	3	5	3	3	4	7	9	6	4	6	6	6	8
18時台	20	11	6	6	7	10	28	17	9	7	10	10	13	22
19時台	21	11	10	9	11	11	20	19	11	10	11	14	12	17
20時台	30	14	12	10	11	13	19	30	13	11	15	18	16	19
21時台	30	19	15	15	13	18	28	27	21	17	19	21	21	26
22時台	15	17	19	16	19	23	26	11	24	19	19	22	24	25
23時台	7	24	26	26	29	31	26	5	22	27	26	34	36	26
24時台	1	10	15	14	15	10	5	1	8	12	13	12	14	8
25時台	0	4	9	7	5	3	2	0	4	7	6	3	3	2
26時台	0	2	3	2	1	2	1	0	1	2	2	2	1	0
27時台	0	1	1	1	0	0	1	0	0	2	1	1	0	1
28時台	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1
29時台	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	1	1	1
計	213	179	192	204	213	235	335	193	190	215	251	288	291	330

付表 5a 時刻別最初の開始(オン)数

(%) 83年

時刻	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
5時台	8.6	8.3	7.7	7.7	7.4	5.3	3.8	7.0	0.6
6時台	28.1	27.8	26.7	27.3	26.6	16.9	11.3	23.5	19.1
7時台	26.1	25.4	25.1	25.2	24.6	19.9	19.6	23.7	26.6
8時台	9.2	8.8	9.4	8.9	9.4	13.9	14.1	10.5	13.0
9時台	1.8	1.8	1.8	1.6	1.8	4.4	6.8	2.9	2.5
10時台	1.2	0.9	0.8	1.3	0.8	2.2	4.3	1.6	1.7
11時台	1.2	1.5	1.2	1.1	1.5	1.5	2.6	1.5	1.1
12時台	2.9	3.1	3.3	3.6	4.2	4.9	4.9	3.8	6.4
13時台	0.6	1.2	0.8	0.9	0.9	1.5	1.5	1.0	1.0
14時台	0.4	0.1	0.3	0.3	0.3	0.9	0.7	0.4	0.7
15時台	0.5	0.3	0.4	0.6	0.4	0.9	1.0	0.6	0.6
16時台	0.9	0.8	0.6	0.7	0.7	1.0	0.9	0.8	1.6
17時台	1.4	1.5	2.2	1.8	1.5	2.0	1.5	1.7	3.1
18時台	1.8	1.8	2.2	1.8	1.4	2.5	3.4	2.1	3.4
19時台	3.6	3.5	2.4	2.6	3.1	3.2	4.2	3.2	5.0
20時台	1.4	1.6	2.2	1.6	2.2	1.7	2.4	1.9	2.9
21時台	1.5	1.7	1.7	2.0	1.7	3.2	2.6	2.0	2.3
22時台	1.1	1.0	1.3	1.5	1.2	1.1	0.9	1.1	0.8
23時台	0.2	0.7	0.4	0.4	0.9	0.9	0.5	0.6	0.5
24時台	0.1	0.1	0.2	0.2	0.4	0.3	0.3	0.2	0.1
25時台	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1	—
26時台	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	—
27時台	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	—
28時台	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	—
計	93	92	91	91	91	88	87	90	93

付表 5b 時刻別最後の終了(オフ)数

(%) 83年

時刻	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	週平均	週平均
5時台	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
6時台	0.8	0.5	0.6	0.8	0.8	0.6	0.3	0.6	0.2
7時台	1.5	1.9	2.2	2.2	2.6	0.9	0.4	1.7	1.2
8時台	1.1	1.5	1.3	1.3	1.6	1.5	0.8	1.3	1.7
9時台	0.4	0.5	0.5	0.4	0.7	0.7	0.8	0.6	0.5
10時台	0.0	0.2	0.2	0.1	0.4	0.4	0.8	0.3	0.3
11時台	0.1	0.2	0.1	0.1	0.0	0.6	0.6	0.2	0.1
12時台	0.5	0.3	0.4	0.3	0.7	0.8	0.6	0.5	0.5
13時台	0.5	0.3	0.7	0.6	0.7	0.9	0.7	0.6	1.4
14時台	0.5	0.3	0.4	0.3	0.3	0.5	0.4	0.4	0.4
15時台	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	0.4	0.2	0.2	0.3
16時台	0.3	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3	0.4
17時台	0.8	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6
18時台	2.1	1.8	2.1	2.1	1.6	2.0	2.1	2.0	2.3
19時台	3.1	3.0	3.3	3.6	3.6	3.7	3.8	3.5	5.4
20時台	7.8	6.8	5.7	6.2	7.5	5.5	6.3	6.6	9.8
21時台	15.2	13.8	13.9	14.2	12.2	11.4	14.0	13.5	20.1
22時台	17.5	20.7	18.9	16.1	15.1	14.4	19.5	17.5	21.9
23時台	25.4	23.3	25.4	26.2	24.4	24.4	21.0	24.3	19.1
24時台	9.4	9.9	7.6	10.0	10.6	10.8	8.2	9.5	5.2
25時台	2.7	3.1	3.5	3.4	3.7	4.8	3.0	3.5	—
26時台	1.2	1.1	1.1	0.8	1.6	1.5	1.5	1.2	—
27時台	0.5	0.8	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	—
28時台	0.3	0.7	0.3	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	—
29時台	0.9	0.6	0.7	0.7	0.8	0.5	0.8	0.7	—
計	93	92	91	91	91	88	87	91	93

付表 6a 時刻別週間開始(オン)日数

(再掲)

(%)

時刻	0日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	1日以上	3日以上	固定度
5時台	83.7	5.8	2.3	1.9	1.6	1.9	1.8	0.9	16.3	8.1	49
6時台	52.1	9.9	6.4	6.5	5.2	11.0	5.9	2.7	47.9	31.3	65
7時台	42.2	15.7	10.5	7.3	5.9	8.5	6.2	3.2	57.8	31.2	54
8時台	57.3	18.7	8.1	4.9	3.8	3.1	2.5	1.4	42.7	15.7	37
9時台	76.0	15.6	4.6	1.8	1.0	0.5	0.3	0.1	24.0	3.6	15
10時台	80.4	13.8	3.3	1.4	0.4	0.6	0.1	0.0	19.6	2.5	13
11時台	74.7	12.9	4.7	3.2	2.2	1.1	0.7	0.4	25.3	7.6	30
12時台	48.6	18.1	9.2	6.7	5.5	5.4	3.8	2.5	51.4	23.9	46
13時台	75.7	14.6	5.0	2.1	1.2	1.0	0.4	0.0	24.3	4.7	19
14時台	83.2	11.7	2.9	1.1	0.5	0.5	0.1	0.0	16.8	2.2	13
15時台	77.7	13.4	4.0	1.6	1.6	1.1	0.4	0.3	22.3	4.9	22
16時台	70.7	13.8	6.3	4.0	2.1	1.7	0.8	0.6	29.3	9.3	32
17時台	53.3	17.6	9.8	6.2	5.1	3.9	2.5	1.4	46.7	19.2	41
18時台	42.9	22.8	12.3	8.7	5.7	4.0	2.2	1.3	57.1	21.9	38
19時台	28.9	22.8	15.5	11.8	9.8	6.5	3.3	1.3	71.1	32.7	46
20時台	41.8	27.1	15.5	7.8	4.7	2.0	1.0	0.2	58.2	15.6	27
21時台	38.9	24.6	16.6	10.3	5.1	3.0	1.1	0.5	61.1	19.9	33
22時台	56.9	19.7	11.5	6.4	3.4	1.4	0.7	0.1	43.1	12.0	28
23時台	74.4	13.6	6.4	3.2	1.5	0.7	0.2	0.1	25.6	5.7	22
24時台	87.2	8.2	2.7	1.3	0.3	0.2	0.0	0.1	12.8	1.9	15
25時台	94.9	4.0	0.6	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0	5.1	0.5	10
26時台	97.7	1.7	0.4	0.0	0.2	0.1	0.0	0.0	2.3	0.3	12
27時台	97.9	1.5	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.2	8
28時台	97.4	1.6	0.5	0.2	0.1	0.1	0.2	0.0	2.6	0.6	22

固定度：1日以上の件数のうち、3日以上の子数が占める割合

付表 6b 時刻別週間終了(オフ)日数

(再掲)

(%)

時刻	0日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	1日以上	3日以上	固定度
5時台	96.0	2.5	0.7	0.4	0.0	0.2	0.2	0.0	4.0	0.8	20
6時台	81.5	7.6	2.8	2.3	2.1	2.0	1.2	0.4	18.5	8.1	44
7時台	52.2	11.5	7.0	5.5	6.8	10.0	5.1	1.6	47.8	28.9	60
8時台	47.2	15.8	9.1	6.8	6.0	6.8	6.0	1.9	52.8	27.5	52
9時台	56.5	20.5	9.1	4.9	3.5	3.1	1.6	0.8	43.5	13.8	32
10時台	70.1	17.8	6.2	3.1	1.3	0.8	0.6	0.1	29.9	5.8	19
11時台	76.2	15.7	4.4	1.6	1.1	0.6	0.2	0.1	23.8	3.6	15
12時台	68.5	16.0	5.4	3.7	2.8	2.1	1.1	0.4	31.5	10.0	32
13時台	57.4	19.6	8.8	5.3	3.8	2.8	1.7	0.7	42.6	14.3	33
14時台	67.9	17.1	6.2	3.4	2.5	1.9	0.8	0.4	32.1	8.8	27
15時台	79.0	13.0	3.8	2.1	1.1	0.6	0.2	0.1	21.0	4.2	20
16時台	80.4	12.5	3.6	1.9	0.8	0.4	0.2	0.0	19.6	3.4	17
17時台	76.3	15.4	4.1	2.2	1.0	0.7	0.3	0.0	23.7	4.2	18
18時台	57.3	19.5	8.6	5.6	3.2	2.6	1.7	1.3	42.7	14.5	34
19時台	53.9	22.1	10.3	6.1	3.7	2.0	1.2	0.6	46.1	13.6	30
20時台	45.6	24.5	14.3	7.8	3.4	2.7	0.9	0.6	54.4	15.6	29
21時台	36.7	23.9	16.2	9.3	6.8	4.1	2.0	1.0	63.3	23.2	37
22時台	37.4	22.0	15.5	11.8	7.0	3.3	2.1	0.9	62.6	25.2	40
23時台	35.0	18.5	13.6	10.5	9.3	6.1	4.5	2.5	65.0	32.9	51
24時台	66.4	15.2	8.4	4.7	2.2	1.7	0.8	0.6	33.6	10.0	30
25時台	84.6	9.3	3.4	1.4	0.8	0.4	0.1	0.0	15.4	2.7	18
26時台	93.3	5.1	1.0	0.5	0.0	0.1	0.0	0.0	6.7	0.6	9
27時台	97.0	2.1	0.5	0.2	0.0	0.2	0.0	0.0	3.0	0.4	13
28時台	97.5	1.9	0.5	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	2.5	0.2	8

固定度：1日以上の件数のうち、3日以上の子数が占める割合

付表 7a 平均視聴継続時間(曜日別) (分)

		月	火	水	木	金	土	日	週
2003年	平均	89	91	89	91	91	102	110	94
	SD	89	87	88	87	89	96	104	92
1983年	平均	76	76	78	81	81	88	98	82
	SD	73	73	74	77	77	84	90	78

付表 7b 平均視聴継続時間(年層別, 週平均) (分)

		男7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~	女7~	13~	20~	30~	40~	50~	60~
2003年	平均	71	69	80	83	88	99	107	73	76	90	90	90	99	104
	SD	62	63	78	78	82	91	109	65	69	83	88	82	95	96
1983年	平均	66	74	87	88	75	88	101	65	70	86	77	80	85	93
	SD	56	72	82	83	67	80	101	57	70	89	70	70	73	95

付表 7c 平均視聴継続時間
(開始時刻別, 週平均) (分)

	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
5時台	100	95	92	94
6時台	84	94	75	85
7時台	69	82	60	62
8時台	75	108	43	58
9時台	74	92	68	88
10時台	80	82	81	106
11時台	92	90	85	80
12時台	78	78	67	68
13時台	77	83	73	73
14時台	100	107	88	91
15時台	136	133	106	107
16時台	143	122	118	103
17時台	133	117	109	101
18時台	132	103	110	92
19時台	121	84	106	73
20時台	95	64	91	55
21時台	88	51	75	44
22時台	64	38	57	32
23時台	51	37	47	26
24時台	54	41	38	17
25時台	54	47	—	—
26時台	62	43	—	—
27時台	47	37	—	—
28時台	30	19	—	—

付表 9 ラジオの視聴変更率
(開始時刻別, 週平均) (%)

	オフ	TV	R→	R→
	→R	→R	TV	オフ
5時台	3	0	0	0
6時台	4	0	1	2
7時台	4	1	1	4
8時台	2	1	1	4
9時台	2	0	0	2
10時台	2	0	0	2
11時台	1	0	0	2
12時台	2	0	1	2
13時台	1	0	0	2
14時台	1	0	0	1
15時台	1	0	0	1
16時台	1	0	0	1
17時台	3	0	1	2
18時台	2	0	1	2
19時台	1	0	1	2
20時台	1	1	1	1
21時台	1	0	0	1
22時台	1	0	0	1
23時台	1	0	0	2
24時台	0	0	0	1
25時台	0	0	0	0
26時台	0	0	0	0
27時台	1	0	0	0
28時台	1	0	0	0

付表 8 チャンネル変更回数(曜日別) (回) 83年

前局	前局	月	火	水	木	金	土	日	週	週
OFF	TV	2.69	2.59	2.55	2.55	2.48	2.34	2.36	2.51	2.47
OFF	R	0.47	0.44	0.43	0.40	0.37	0.29	0.23	0.37	0.44
TV	OFF	2.69	2.60	2.55	2.55	2.48	2.35	2.36	2.51	2.49
TV	R	0.11	0.09	0.09	0.09	0.08	0.05	0.06	0.08	0.07
R	OFF	0.47	0.43	0.43	0.40	0.37	0.28	0.22	0.37	0.43
R	TV	0.11	0.10	0.09	0.10	0.08	0.06	0.06	0.09	0.09
OFF	—	3.21	3.09	3.05	3.02	2.91	2.72	2.69	2.96	2.91
TV	—	2.80	2.69	2.64	2.65	2.56	2.40	2.42	2.59	2.56
R	—	0.58	0.53	0.52	0.50	0.44	0.34	0.28	0.46	0.52
	計	6.59	6.30	6.21	6.16	5.92	5.47	5.40	6.01	5.99

付表 10a チャンネル変更回数(関東, 1日あたり, 2003年)

(回)

2003年 後局	前局(から)										計
	OFF	総合	教育	NTV	TBS	フジ	朝日	東京	その他	BS	
OFFへ	0.09	0.57	0.08	0.45	0.38	0.54	0.33	0.19	0.05	0.07	2.74
総合へ	0.65		0.01	0.06	0.04	0.05	0.04	0.02	0.00	0.01	0.89
教育へ	0.08	0.02		0.01	0.01	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.13
NTVへ	0.46	0.08	0.01		0.05	0.06	0.04	0.02	0.00	0.01	0.72
TBSへ	0.36	0.05	0.00	0.05		0.07	0.04	0.02	0.00	0.00	0.60
フジへ	0.53	0.07	0.01	0.08	0.06		0.05	0.02	0.00	0.01	0.82
朝日へ	0.29	0.05	0.00	0.05	0.04	0.06		0.03	0.00	0.01	0.53
東京へ	0.16	0.04	0.01	0.03	0.02	0.03	0.02		0.00	0.00	0.31
その他	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07
BSへ	0.06	0.01	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.10
計	2.74	0.89	0.13	0.72	0.60	0.82	0.53	0.31	0.07	0.10	6.91

付表 10b チャンネル変更回数(関東, 1日あたり, 1983年)

(回)

1983年 後局	前局(から)									計
	OFF	総合	教育	NTV	TBS	フジ	朝日	東京	その他	
OFFへ	0.08	0.91	0.05	0.35	0.37	0.39	0.35	0.13	0.01	2.65
総合へ	0.97		0.01	0.04	0.05	0.04	0.03	0.01	0.00	1.17
教育へ	0.05	0.01		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.08
NTVへ	0.34	0.07	0.00		0.04	0.04	0.06	0.02	0.00	0.56
TBSへ	0.36	0.06	0.00	0.05		0.06	0.04	0.02	0.00	0.59
フジへ	0.38	0.06	0.00	0.05	0.06		0.05	0.02	0.00	0.61
朝日へ	0.34	0.05	0.00	0.05	0.04	0.05		0.03	0.00	0.56
東京へ	0.11	0.02	0.00	0.02	0.02	0.02	0.02		0.00	0.22
その他	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02
計	2.65	1.17	0.08	0.56	0.59	0.61	0.56	0.22	0.02	6.45

付表 10c チャンネル変更回数(関東, 局まとめ別)

(回)

03年	前局					83年	前局			
	OFF	NHK	民放	BS	計		OFF	NHK	民放	計
OFFへ	0.09	0.73	1.85	0.06	2.74	OFFへ	0.08	0.96	1.61	2.65
NHKへ	0.66	0.03	0.32	0.01	1.02	NHKへ	1.02	0.02	0.21	1.25
民放へ	1.92	0.25	0.86	0.02	3.05	民放へ	1.54	0.27	0.75	2.56
BSへ	0.07	0.01	0.02	0.00	0.10					
計	2.74	1.02	3.05	0.10	6.91	計	2.65	1.25	2.56	6.45

付表 11 平均視聴継続時間(同チャンネル)

【11a 曜日別】

(分)

	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
全体	60	46	53	38
月	57	46	50	35
火	57	44	50	35
水	56	45	52	37
木	58	44	53	38
金	59	45	53	37
土	67	49	57	39
日	65	48	60	42

【11c 視聴開始時刻別】

(分)

週平均	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
5時台	62	56	62	93
6時台	56	43	51	42
7時台	49	39	49	35
8時台	52	54	38	29
9時台	53	38	41	25
10時台	63	43	63	38
11時台	48	44	52	37
12時台	60	43	47	35
13時台	53	41	56	37
14時台	71	48	63	40
15時台	77	64	72	57
16時台	80	56	66	51
17時台	64	52	50	33
18時台	59	53	46	37
19時台	72	50	56	41
20時台	58	40	62	33
21時台	71	43	67	35
22時台	52	27	48	24
23時台	39	26	40	21
24時台	41	35	36	18
25時台	58	55	—	—
26時台	52	33	—	—
27時台	47	31	—	—
28時台	28	16	—	—

【11b 男女年齢別】

(分)

週平均	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
男7歳	53	35	41	26
男12	51	36	48	33
男20	53	41	53	37
男30	51	41	54	40
男40	57	40	53	36
男50	60	50	57	38
男60	63	47	65	52
女7歳	50	35	39	23
女12	55	42	48	29
女20	55	43	56	39
女30	52	40	52	34
女40	56	43	54	36
女50	62	47	56	36
女60	70	52	66	48

【11d 前視聴局別】

(分)

週平均	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
総合	59	51	52	43
教育	47	35	42	27
NTV	58	43	53	35
TBS	58	39	55	34
フジ	64	48	57	36
朝日	60	40	56	38
東京	58	41	47	29
その他	63	77	51	42

【11e 後視聴局別】

(分)

週平均	2003年		1983年	
	平均	SD	平均	SD
OFFへ	61	47	55	39
総合	57	44	47	29
教育	56	43	51	38
NTV	54	41	52	34
TBS	59	47	52	36
フジ	55	41	50	33
朝日	60	47	50	36
東京	57	43	48	31
その他	52	39	47	36